

文部科学省 WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業

2023年度

〈2022年度指定 第2年次〉

研究開発実施報告書

～ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト～



2024年3月

名古屋商科大学系列校

名古屋国際 中学校
高等学校

NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

ご挨拶

《事業拠点校》

2年目を迎えた、文部科学省「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」事業拠点校としての本校における大きなテーマは、「連携深化～社会との連携による学びの拡充でSociety 5.0を生き抜く～」としました。また、地域創生型スタートアップ関連事業プラットフォームとして、『ConnectEd』を立ち上げ、本校は『ConnectEd』拠点校として次の4つのカテゴリで繋がりを強くしました。1つ目は、企業（スタートアップ・社内アドベンチャー）です。新技術に関する学習リソースの提供や協働による製品開発、ワークショップの機会提供をいただいています。2つ目は、国際機関・行政機関です。オープンデータ、地域資源やネットワークの活用、そしてコンテストの機会提供をいただいています。3つ目は、国内外の大学です。イノベーションやアントレプレナーシップに関する研究成果や実証実験フィールドの提供をいただいています。4つ目は、NPO・NGOです。地域課題や世界共通課題の解決に関する知見やノウハウの提供をいただいています。これらの活動については、2月に開催されたWWLコンソーシアム構築支援事業成果報告会（ConnectEd 2024）にて、発表をいたしました。またその時には、一般社団法人中部経済連合会国際部部长 野村一樹氏をお迎えし、「名古屋から広げる国際経済交流」のテーマのもとで基調講演をいただきました。国際経済交流において若い世代から接することが発展に繋がるという内容でした。また12月には、WWL高校生国際会議を開催しました。今年度は、モンゴルのBritish School of Ulaanbaatarが参加をし、海外からの高校生の視点でも議論を繰り広げることができました。なお、会議に先立ちグレーター・ナゴヤ・イニシアティブ協議会アシスタントマネージャーの滝鈴花氏をお迎えし、多様な学びとヒトとの出会いの場・新しいアイデアと実践の共有の場・先進的な教育実践の情報発信の場に関する講演をいただきました。本校は、建学の精神「Frontier Spirit（開拓者精神）」の教育理念のもと教育活動をしており、今後さらなるイノベティブなグローバル人材の育成に取り組むことが使命であると強く確信しています。

最後になりましたが、本研究開発実施報告書に記載の通り、各関係機関の皆様方から多大なるご支援・ご協力を賜り、本校の「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」の内容が着実に深化し、指定2年目が経過しましたことを心から感謝をし、厚く御礼申し上げます。

令和6年3月

学校法人栗本学園
名古屋国際中学校・高等学校
校長 小林 格

ご挨拶

《管理機関》

管理機関・学校法人栗本学園（名古屋商科大学）より一言ご挨拶を申し上げます。この度、名古屋国際中学校・高等学校が「ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレート・ナゴヤ・プロジェクト」の名称で文部科学省「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」（2022-2024年度）にめでたく採択され、2年目から3年目に移ろうとしている今、恙無くその取り組みが進展しているとともに、次なる飛躍への土壌が育まれていることを大変素晴らしいこととお喜び申し上げます。

コロナ禍を経てニューノーマルを模索する時代において、人々の思考や価値観が先鋭化するとともに、これまで以上にネットワークに取り込まれるようになってきています。自己をしっかり鍛錬するだけでなく、社会や他者との関係で結果を残すことが地域社会や産業界から要請されるようになっていきます。その意味で、この事業は愛知県だけでなく我が国全体の将来を担う人材を育てる、大いなる挑戦をしています。この事業の特徴は、①イノベティブな人材を育てること、②グローバルな人材を養成すること、そして③アドバンスト・ラーニング・ネットワーク（ALネットワーク）を作り上げること、以上の3点であると思います。これまで培ってきたグローバルな教育の実績に基づいて、さらにイノベティブなスキルを磨き上げる挑戦が、この1-2年目に次々と実績として花開きつつあります。さらに2-3年目はALネットワークの実質化に向けて「Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びConnetEd2024」のますますの発展が社会から期待されています。これから永続的に繋がるワールドワイドなビジネス教育の学びのプラットフォームの形成が進行していると言えるでしょう。

本事業の推進体制についても、以前に2019-2021年度に「持続可能なランドスケープの設計 ～天白川水系から世界を俯瞰する～」の取り組み（文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」グローバル型に採択）の時からご指導頂いてきた北村友人先生（東京大学・教授）および伊藤博先生（名古屋商科大学・教授）に継続して運営指導委員会のご指導を頂きつつ、カリキュラムについては木本健太郎先生がアドバイザーとなり、さらには検証委員として鶴飼宏成先生（名古屋市立大学・学長補佐）、光永悠彦先生（名古屋大学・准教授）、そして小野裕二先生（名古屋商科大学・教授）の3名の素晴らしいメンバーをお迎えし、グローバル・ローカルの両面で飛躍する素地がこの面でも固まりつつあります。これによりさらにこの取り組みや活動が多角的な観点からの検証と改善につながり、このようにしてSociety 5.0に向けた人材育成がますます加速していくことを期待しています。そして、同じく実践的な教育に取り組む名古屋商科大学が進めているケースメソッド教育、そして商学部が中心に推進しているフィールドメソッド教育とのシームレスな運動につながりますことを祈念いたしまして、ここにご挨拶の言葉に代えさせていただきます。

令和6年3月
学校法人栗本学園
名古屋商科大学 商学部
教授 亀倉正彦

目 次

【1】	本校の概要	1
【2】	研究開発概要	2
【3】	概念図	4
【4】	事業実施計画	5
【5】	令和6年度活動計画	1 2
【6】	令和5年度国際理解研修概要	1 4
	(a) 行程表	
	(b) 生徒報告書	
	(c) 引率教員講評	
【7】	令和5年度実践活動	
	概要	4 0
	[A] 学校設定科目—WWL特論—	4 1
	[B] 高校生国際会議（奈良県）	4 5
	[C] 2023年度全国高校生フォーラム（東京都）	4 6
	[D] メタバースの広がり—東海テレビ放送株式会社と連携— —特色ある部活動—	4 8
	[E] Business Design Club実践報告	5 0
	[F] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践報告	5 1
【8】	WWL高校生国際会議	5 4
【9】	ConnectEd2024	6 3
【10】	リングスキルを用いたWWL対象生徒の英語力効果測定	7 0
【11】	運営指導委員会（ALネットワーク運営委員会・検証委員会）	7 5
【12】	カリキュラム委員会（WWLカリキュラム開発会議）	8 1
【13】	講評	9 2
	○伊藤 博氏（運営指導委員）名古屋商科大学大学院マネジメント研究科教授	
	○北村友人氏（運営指導委員）東京大学大学院教育学研究科教授	
【14】	次年度に向けて	9 5
	○黒宮祥男 名古屋国際中学校・高等学校 国際教育推進主任	

【1】本校の概要

(1) 学校基本情報

学校名：学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

校長名：小林 格

所在地：愛知県名古屋市昭和区広路本町1-16

電話番号：052-858-2200・052-853-5151

FAX番号：052-853-5155

(2) 課程・学年・学級数及び教職員数

① 課程・学年・学級数（令和5年5月）

課程	学科	高校第1学年		高校第2学年		高校第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全 日 制	普通科(中高一貫)	59	2	51	2	53	2	163	6
	普通科(グローバル探究)	30	1	16	1	23	1	69	3
	普通科(国際バカロレア)	24	1	20	1	18	1	62	3
	国際教養科	36	1	38	1	28	1	102	3
計		149	5	125	5	122	5	396	15

② 教職員数（令和5年5月）

校長	教頭	教諭	養護教諭	常勤講師	非常勤講師	事務職員	委託事務職員	用務員	計
1	2	19	1	12	23	3	1	1	63

(3) 学校の特徴

① 建学の精神

「開拓者精神（フロンティア・スピリット）」

② 5つのグローバルアクション

(A) WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 指定校

(B) 国際バカロレア・ディプロマプログラム 認定校

(C) 国際教養科の設置

(D) サステイナブルスクール 認定校

(E) 文部科学省教育課程特例校

③ 本校では、国際的に活躍できるグローバル・リーダーに求められる国際的素養を、次の5つの能力の向上によって醸成されると考えている。

(A) 国際的な視野に立って思考する能力

(B) 外国語でコミュニケーションする能力

(C) 寛容な態度をもって問題を解決する能力

(D) 物事を主体的に探究する能力

(E) 自らを省察して多面的に評価する能力

【2】研究開発概要

期 間	ふりがな	がっこうほうじんくりもとがくえん	所在都道府県
令和4年度 ～ 令和6年度	管理機関	学校法人栗本学園	愛知県
	ふりがな	なごやくさいちゅうがっこう・こうとうがっこう	
	事業拠点校	名古屋国際中学校・高等学校	

令和4年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業 構想計画書

1 構想目的・目標の設定

(1) イノベティブなグローバル人材像

名古屋国際中学校・高等学校が、開校以来掲げるグローバルリーダーの行動指針は、以下の5つの能力を身につけさせることとしている。

- ・ 国際的な視野に立って思考する能力
- ・ 外国語でコミュニケーションする能力
- ・ 寛容な態度をもって問題を解決する能力
- ・ 物事を主体的に探究する能力
- ・ 自らを省察して多面的に評価する能力

この行動指針の能力を獲得させるために、本校は令和元年度文部科学省指定の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」(以下、地域協働推進校(グローバル型)とする)に取り組み、グローバル人材を育成してきた。この延長として本事業を通じて育成するイノベティブなグローバル人材像を下記の通りとする。

【目指すイノベティブなグローバル人材像】

「自らが出会う新しい時代の価値や課題を読み、新たな技術・スキルを身に付け、協働と革新を持続しながら新しい道を切り拓く人材」

本校が、卒業までに生徒に習得させる具体的な能力は、以下の5つである。

- ① コミュニケーション能力・・・イノベティブなグローバル人材には、自分の考えを相手に正確に伝えるための対話力が基盤となる。それには論理的に説明できる文章表現力及び基礎的な読解力が必要となる。さらに、表情や動作などの身体的表現を意図的に用いたり、相手の意図や感情を汲み取って共感的に理解できたりする力を身につけていく。
- ② 共生協働能力・・・個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かし、共に支え高め合える社会の実現を目指すための共生協働の精神を育み、社会的スキルを高めていく。
- ③ 自己管理能力・・・自分の目標や目的を達成させるための道のりで価値を見つけるために、自分をどれだけコントロールし、感性を磨くことができるかが、マネジメントを行う上で必要となる。そのために計画を立て、一つひとつをクリアし、探究活動をし、振り返りをし、着実に遂行する堅実さを身につけていく。
- ④ 情報活用能力・・・情報活用能力は、学習の基盤となる資質能力であり、情報の収集・整理・比較・発信・伝達・保存・共有から情報手段の基本的操作、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計まで幅広く身につけることは、課題解決学習に必要な能力となる。
- ⑤ 科学的思考能力・・・科学的思考能力とは、批判的な疑問・予想・条件制御・比較分類・モデル化・論理的な推論・総合的な判断の要素で成り立っており、イノベティブな新しいアイデアを生み出す原動力となる。

(2) ALネットワークの目的と役割

ALネットワークは、事業拠点校である本校の電子図書館から情報を発信し、また情報を集約し、アーカイブ機能を保持することとなる。そして様々な学校や団体が構成し、協力してイノベティブなグローバル

人材を育成することを目的としたコンソーシアム体制を構築する。管理機関及び事業拠点校に加え、国内外の大学及び国内外の高校、国際機関、スタートアップ、企業、NPO等の団体を擁するネットワークとなる。ALネットワークの役割として、以下の7つがある。

- ① 高校生のアントレプレナーシップの形成
- ② ALネットワークコンソーシアムの構築
- ③ グローバル拠点都市と世界を繋ぐカリキュラム開発
- ④ 高校生国際会議の開催
- ⑤ 海外からのインバウンド強化をし、留学生とともに学ぶ学習組織づくり
- ⑥ 高校大学大学院と連携をした単位先取り認定学習の構築
- ⑦ 生徒への講演会、教員の研修やセミナーの開催

事業連携校は、この取り組みの構築や改善に関与しつつ、それぞれが持つ独自のプログラムをALネットワーク内で共有する。また、国際機関、スタートアップ、企業、NPO等の団体も同様に独自の資源を共有すると同時に生徒や教員の研修に参加し、学校へアドバイスするなどして学校で不足する部分を補うこととする。

(3) 短期的、中期的及び長期的な目標

本校は、本事業を通し、地域創生を加速させるためにアントレプレナーシップを醸成させ、グローバル拠点都市がスタートアップを起爆剤にイノベーション創出の土壌形成に関わり、世界と繋ぐことを下記の①～③の3つの目標とする。また、令和6年に名古屋市昭和区の鶴舞エリアでSTATION Aiが運用されるので本校の電子図書館と共用開始をする。

- ① 短期目標 令和4年～令和6年 Meta-School構築（対話セッション、国際会議開催）
- ② 中期目標 令和7年～令和9年 Meta-School強化（STATION Ai供用開始）
- ③ 長期目標 令和10年～ イノベーション創出土壌形成
(スタートアップ人材の創出)

(Meta-Schoolとは、仮想空間ツールを利用して、スタートアップとコラボレーションし、高校生のアイデアを反映させ、世界と地域が抱える社会的課題の解決を目指す学習の場)

本校は、下記の3つのビジョンを策定しており、イノベティブな人材像やALネットワークの目的と役割を果たす元となっている。

Vision 1 世界基準の魅力ある国際教育を先駆的に取り組む私立学校

Vision 2 持続可能な国際社会に貢献できる高い志を持った国際生

Vision 3 世界と日本の未来を担うリーダーとして活躍する卒業生

この3つのビジョンを実現するために、12のAction Planを実行する。

【4】事業実施計画

- 1 事業の実施期間：(契約締結日)～令和7年3月31日
- 2 事業拠点校名：名古屋国際中学校・高等学校(学校長 小林 格)
- 3 構想名：ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト
- 4 構想の概要：「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」を構築し、ニューノーマル時代に生きるイノベティブなグローバル人材を育成する。「自らの地域課題の発見と解決に向けたアイデアの創出と実践」を事業連携校との共通の研究テーマとし、事業拠点校では地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)の研究課題を発展させる。生徒は、地域や国ごとの実践活動に対し、高度な専門的知識の習得や建設的な議論を行うために仮想空間「Meta-School」に参加し、多様な学びを体験できる場を得る。その過程において、事業協働機関や愛知県に拠点を置くスタートアップとの協働活動や留学生との交流により、イノベーション創出のための素養として必要なアントレプレナーシップを獲得する。高校生国際会議では、生徒・教員それぞれが議論する場を作り、WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)対話セッションでは、一般参加者との交流も踏まえ、本事業の趣旨を広く普及啓発していく。
- 5 令和5年度の構想計画(本事業における教育課程の特例の活用：無)
令和4年～令和6年は、短期目標としてMeta-School構築(WWL対話セッション、国際会議開催)を計画している。その指定2年目として、以下の項目を実施する。

[1] ALネットワークの構築

令和5年度は、地域協働推進校(グローバル型)で構築した事業連携校・事業協働機関に加え、愛知県経済産業局革新事業創造部スタートアップ推進課を基軸としたアントレプレナーシップを持つ人材による対話を増やし、より先進的な取組の実践を可能としたネットワークの構築を図る。また、事業拠点校が持つ以下のネットワークから得られた情報や交流の機会を事業連携校に共有を図ることでALネットワークに所属する生徒にとって有機的なネットワークを目指す。

(ア) SGHネットワーク:文部科学省

(イ) #せかい部：文部科学省

(ウ) ASPnet(ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワーク)：ユネスコ

(UNESCOパリ本部) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

(エ) 地方創生SDGs官民連携プラットフォーム：内閣府 地方創生推進事務局

(オ) 愛知県SDGs登録：愛知県政策企画局

(カ) 名古屋市SDGs推進プラットフォーム：名古屋市総務局

事業連携校・事業協働機関との交流においてはビデオ会議システム(Zoom)や仮想空間(メタバース)であるMeta-Schoolで行う。Meta-Schoolでは、ビデオ会議システム(Zoom)や対面以外の新しい交流の中で生み出される表現の自由度や交流の流動性などを検証す

る。Meta-Schoolのインフラ開発は、事業拠点校ICT・DX担当が行う。

スタートアップによる特別講義は、STATION Ai関連のスタートアップ企業やデータサイエンス関連は名古屋商科大学を予定している。

事務局では、5月から事業連携校・事業協働機関との調整・連絡等の事務活動及び情報の共有や配信を実施し、Googleドライブによる情報集積のシステムの整備やInstagram/Facebook/Youtube等のソーシャルメディアの効果的な活用による情報やデジタルブックの配信を実施する。

ALネットワークの構築は以下の組織で実施する。

【運営組織】

管理機関：学校法人栗本学園 事業拠点校：名古屋国際中学校・高等学校
管理機関内にALネットワーク責任者を置き、次の協議会及び委員会を開始する。

◎ALネットワーク協議会（管理機関・事業拠点校・事業連携校・事業協働機関）

○ALネットワーク運営委員会（管理機関・事業拠点校）

・カリキュラム開発部：カリキュラムアドバイザーを中心としたカリキュラム管理

【事業協働機関】

名古屋商科大学（NUCB）・名古屋商科大学大学院（NUCB）・Macquarie University（オーストラリア）・国際連合地域開発センター（UNCRD）・愛知県経済産業局革新事業創造部スタートアップ推進課・日進市生活安全部市民協働課市民協働係・独立行政法人国際協力機構（JICA）中部センター・公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）・公益財団法人名古屋国際センター（NIC）・特定非営利活動法人アイキャン（ICAN）・中部国際空港株式会社・西日本電信電話株式会社・デロイトトーマツベンチャーサポート株式会社

【事業連携校】

名古屋市立名東高等学校・奈良県立国際高等学校・高知県立高知国際高等学校・国際高等学校・Immaculate Conception School of Baliuag（フィリピン）・Juan Diego Catholic High School（アメリカ）・Lycée Georges Clemenceau（フランス）・UCSI International School（マレーシア）

[2] 先進的なカリキュラム研究開発・実施

(1) 文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発

（新たな教科・科目の設定）

(a) WWL特論：地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）で実践していたSIA特論の内容を継承してWWL特論として2022年度4月より開講している科目の充実を図る。社会文化的視点（多文化共生と減災）、経済的視点（経済活動と貧困）、環境的視点（社会生活と循環）をキーワードにスタートアップに関する実践活動とALネットワークの効果的な活用を目指す。マーケティングや数的処理などの情報活用能力を高め、事業協働機関やスタートアップと連携するPBL（Project Based Learning・課題解決型学習）の学校設定科目「WWL特論Ⅰ・Ⅱ」を学校設定教科「サステイナビリティ」内に新設する。

(b) グローカル探究（総合的な探究の時間を使用）[高校1～3年生 1単位]：「多文化共生と減災」「経済活動と貧困」「社会生活と循環」についてグローバルな視点グローバルな視点の両方から学習する。高校1年次は、3分野の基礎学習とICTリテラシー

や文書作成、プレゼンテーションソフトのスキルについても学習する。高校2年次以降に生徒は各自取り扱う分野を1つ選択し、当該分野に関わる理想のまちづくりについて調査し、課題研究を行う。

(c) アカデミックリテラシー [高校3年生 7単位]：高校3年生を対象に、名古屋商科大学での授業を先取り履修する。単位数は、本校で4単位、大学の1教科2単位として単位認定される。4教科受講するので最大8単位先取りできる。

(d) English Skills I・II [高校1・2年生 2または3単位] / Project Skills [高校3年生 3単位]：ネイティブインストラクターが指導する科目。既存の学校設定科目であるが、英語での自己表現（ディスカッション、プレゼンテーション）、英語での情報収集（文献や海外ホームページ等）、英文による論文要旨の書き方等、実践活動に必要な英語スキル醸成に向けて指導内容を改編する。

(2) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施

[海外研修]

令和2年度・令和3年度地域協働推進事業（グローバル型）において実施したオンライン型国際理解研修（カンボジアとオーストラリア）及び令和4年度の国際理解研修の実績を活かし、PBLの国際理解研修を高校2年次で行う。対象生徒は実際に現地に赴く「海外フィールドワーク」と事前のオンラインによる研修に参加する。

[詳細]

カンボジア・ベトナム1週間コース（カンボジア・ベトナム）：2023年8月16日～23日 事業支援対象

[内容]

カンボジア・トンレサップ湖畔のコンポンプルック村においてフィールドワークを実施する。事前に、グループごとに国内にて探究テーマを設定し、オンラインにて現地とフィールドワークの計画を立てる。フィールドワークによる調査以外に植樹作業（“国際の森”：令和2年から継続しているマングローブの植樹）や歴史学習、現地学生との交流を計画している。

[国際理解講演会]

毎年開催している国際理解講演会を新たにMeta-School内に配信し、情報を共有する。令和5年6月17日 国際理解講演会の実施（名古屋国際中学校・高等学校アトリウム）
講演者：山口昌子（やまぐち しょうこ）氏：産経新聞で特報部、外信部次長、パリ支局長を歴任。

- (スケジュール) (1) 講演・パネルディスカッション（代表生徒及びファシリテーター）
(2) インタビュー：代表生徒によるインタビュー

[3] Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びWWL対話セッションの実施

(名称) WWL高校生国際会議

(場 所) 事業拠点校及びオンライン (Meta-School)

(スケジュール)

5月 準備開始 (組織編成の確定)、事業連携校への概要説明

11月下旬 開始要項の決定

12月27日(水) WWL高校生国際会議開催

(内 容) 事業拠点校及び事業連携校における地域協働・国際性を軸とした課題解決に向けた実践活動の報告及びスタートアップによる講演と助言。仮想空間 (メタバース) 上で参加生徒が自由にコミュニケーションし、ビデオ会議システム (Zoom) では実現できなかった動きを交えた自己表現や一体感が生まれる活動を計画している。

・各学校での実践活動の共有

(名 称) ConnectEd 2024 WWLコンソーシアム構築支援事業成果報告会

(内 容) 地域協働推進校 (グローバル型) で実施した対話セッションの実施方法を継承しつつ、ALネットワークを活用した多様な活動の発表に関する対話セッションを行う。より柔軟で多様な意見の集積を行い、高校生国際会議に向けた諸活動のブラッシュアップを図る。

(場 所) 事業拠点校及びオンライン (ビデオ会議システム (Zoom))

(スケジュール) 令和6年2月3日(土)

(参加者) 事業拠点校関係者・事業連携校・事業協働機関・一般参加者など

[4] 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証
国際バカロレアにおいて用いられる「コミュニケーションスキル」「社会性スキル」「自己管理スキル」「リサーチスキル」「思考スキル」を活用し、本取り組みにおいて、生徒自己評価、担当教員評価、連携機関による評価を踏まえた評価方法の開発を目指す。

令和4年度からは、地域協働推進事業 (グローバル型) で課外活動として実施した生徒と企業が連携した活動の流れを学校設定科目に組み込むとともに、担当部門を立ち上げ、ATLに基づく評価方法で評価する仕組みを確立する。

(スケジュール)

5月下旬: アンケート部門の組織化及びアンケート内容の検討を開始

7月下旬・12月上旬・3月上旬: アンケートの実施及び検証

[5] カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置

カリキュラム開発部の設置及びカリキュラムアドバイザーを5月から配置する。カリキュラム委員会月1回実施し、カリキュラムアドバイザーによる助言をもとにカリキュラムの改善等を行う。

〈カリキュラムアドバイザー〉

氏名：木本健太郎 氏

東京大学大学院修了。中学高校理科、高校地理教員免許・専修免許を保持。「環境プランナー」の資格を持つ。東京大学大学院在学中には自ら5つの会社を立ち上げるなどスタートアップの経験・実績を持つ。勤務体制：カリキュラム開発部所属。対面ミーティング（月1回程度）、テレワーク（週2日）。カリキュラム委員会への助言や提案を行う。

[6] 高大連携によるカリキュラム開発

- (1) アカデミックリテラシー：名古屋商科大学にて科目履修を4月開講（高校3年生）
- (2) WWL特論「高大連携」：4月から開講（高校3年生）
- (3) 上記（2）の授業をMeta-School内のシステムに組み込み、令和5年度には事業連携校の生徒も受講できる体制を整える。

[7] カリキュラム開発における財政支援

(1) ICT機器及び通信機器：

地域協働推進事業（グローバル型）実施にあたり、オンラインを使用した実践活動における通信環境の整備や教員が使用するICT機器（iPad・モバイルルーター・有線ケーブル等）の調達のために費用を負担する。

- (2) 国際理解研修（カンボジア・ベトナムコース）にかかる旅費、その他スタートアップに関わる新規プロジェクトや研究活動によって発生する交通費等を負担する。
- (3) 国際バカロレア・ミドル・イヤーズ・プログラム（MYP）の評価手法に関わる研修費用（IBOワークショップ）の負担する。
- (4) WWL先進校への視察に係る交通費を負担する。

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者（敬称略）
[1] ALネットワークの構築	名古屋国際中学校・高等学校 名古屋商科大学 名古屋市立名東高等学校 奈良県立国際高等学校 高知県立高知国際高等学校	小林 格・黒宮祥男 石井博巳・鈴木麻衣子 久木田隆宏 中尾雪路 廣瀬法民
Meta-Schoolのインフラ開発	名古屋国際中学校・高等学校	奥村仁崇・後藤彩可 神山清光
[2] 先進的なカリキュラム研究開発・実施		
（1）文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発	名古屋国際中学校・高等学校 名古屋商科大学	（WWL特論）内藤圭祐 ・伊藤 恵・河合航輝 （総合）大西康介・近藤佑思 （留学）鈴木 悟 （スタートアップ）黒宮祥男・ Ussama Tanveer
（2）カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施	名古屋国際中学校・高等学校	大西直子 伊藤亘央
[3] Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びConnectEdの実施	名古屋国際中学校・高等学校	黒宮祥男
[4] 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証		
国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価	名古屋国際中学校・高等学校	渡邊えみ
アンケート実施・分析	名古屋国際中学校・高等学校	伊藤 恵・深田歩未
[5] カリキュラムを研究開発する人材の指定・配置	名古屋国際中学校・高等学校	木本健太郎 鈴木 悟
[6] 高大連携によるカリキュラム開発	名古屋国際中学校・高等学校	大西直子・近藤佑思

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（契約日～令和6年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
[1] ALネットワークの構築												
		協議会 ／ 協働事業計画 開始										協議会
Meta-Schoolの インフラ開発	検討 開始	研修					仮運用			国際 会議		分析 検証
[2] 先進的なカリキュラム研究開発・実施												
(1) 文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発／研究発表	科目 開始	委員会	講演会 (全学 年)・委 員会	委員会		委員会 ／発表	委員会	委員会	委員会 ／高校 生国際 会議	委員会 ／ WWL フォー ラム	委員会 ／対話 セッシ ョン	委員会 分析 検証
(2) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施	説明会 2回		探究 学習 開始		カンボ ジア FW2 年		活動 発表		活動 発表			
[3] Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びWWL対話セッションの実施		計画 開始							高校生 国際 会議		対話 セッシ ョン	
[4] 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証				アンケ ート 実施					アンケ ート 実施			アンケ ート実 施／ 分析 検証
[5] カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置		MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	分析 検証
[6] 高大連携によるカリキュラム開発	科目 開始 FW											分析 検証

(注) FW（フィールドワーク）MTG（ミーティング）

【5】令和6年度活動計画

令和6年度は、令和5年度までに構築した事業連携校・事業協働機関に加え、海外連携校との交流や企業連携を増やすことで、より広い範囲でのアントレプレナーシップを持つ人材による対話を増やし、より先進的な取組の実践を可能としたネットワークの構築を図る。

また、事業拠点校が持つネットワークから得られた情報や交流の機会を事業連携校に共有を図ることでALネットワークに所属する生徒にとって有機的なネットワークを目指す。また、STATION Aiが10月開始され、ALネットワーク内に組み込むことでより社会と繋がった交流環境の整備を目指す。令和2年度・令和3年度地域協働推進事業（グローバル型）において実施したオンライン型国際理解研修（カンボジアとオーストラリア）・令和4年国際理解研修（カンボジア・ベトナム、シンガポール・マレーシア、カナダ、オーストラリア）・令和5年国際理解研修（カンボジア・ベトナム、シンガポール・マレーシア、オーストラリア）・フランス研修の実績を活かし、課題解決型学習（PBL）の国際理解研修を高校2年次で行う。対象生徒は実際に現地に行く「海外フィールドワーク」に参加する。カンボジア・ベトナムコースでは、日本へのライブ配信を実施したので、令和6年度は事業連携校に加えALネットワークに属する企業等に配信する計画である。以下、令和6年度の国際理解講演会、国際理解研修等の計画である。

[国際理解講演会]

6月15日 国際理解講演会の実施（名古屋国際中学校・高等学校アトリウム）

（講演者）松浦晃一郎氏

（外交官：ユネスコ第8代事務局長、駐フランス共和国特命全権大使）

（スケジュール）（1）講演・パネルディスカッション（代表生徒及びファシリテーター）

（2）インタビュー：代表生徒によるインタビュー

[国際理解研修]

（a）ベトナム・カンボジアコース：8月18日～25日予定（事業支援対象コース）

（b）シンガポール・マレーシアコース：7月24日～28日予定

（c）オーストラリアコース：7月20日～8月25日予定

（d）大韓民国：10月14日～10月17日予定

[WWL高校生国際会議]

（場 所）事業拠点校及びオンライン（Meta-School）

（スケジュール）

5月 準備開始（組織編成の確定）、事業連携校への概要説明

8月 第2回開催予定（新規予定）

12月26日開催

[ConnectEd 2 0 2 5 WWLコンソーシアム構築支援事業成果報告会]

(内 容) 令和 6 年 2 月 3 日に実施したConnectEd 2 0 2 4 の実施方法を継承しつつ、ALネットワークを活用した多様な活動の発表を実施する。より柔軟で多様な意見の集積を行い、高校生国際会議に向けた諸活動のブラッシュアップを図る。

(場 所) 事業拠点校及びオンライン（ビデオ会議システム：Zoom）

(スケジュール) 令和 7 年 2 月 1 日（土）

(参加者) 事業拠点校関係者・事業連携校・事業協働機関・一般参加者など

【6】令和5年度国際理解研修概要

[1] 南オーストラリア（令和5年7月23日（土）～8月26日（土）4週間コース）

①研修の目的

様々な能力を養うために、教科書や教員の話が中心である受け身の学習ではなく、海外研修で自らが動き、感じ、気づく能動的な学習が必要である。南オーストラリア4週間コースでは、オーストラリアの生活習慣や物の考え方を自分の身体と知性と感性で触れることで「国際人」になるための能力を養うことを目指した。

②対象生徒

高校2年（普通科中高一貫クラス、普通科グローバル探究クラス、国際教養科）15名
引率教員：1名

③活動内容について

参加生徒15名がそれぞれ4つの現地校（Geelong Lutheran College, Melton Christian College, St. Francis Xavier College）に分かれて、ホームステイ先から通った。ホームステイ先は1家庭1名にして、できる限り英語での交流ができるように行われた。また、毎週1度は現地のカウンセラーによる相談会を設けて、その週の悩みや進行状況を確認し、学校とホームステイ先での問題がないかを確認した。

④研修の主なスケジュール

令和5年4月22日（土）：生徒・保護者説明会①

令和5年5月19日（金）：生徒・保護者説明会②

令和5年7月21日（金）：生徒・保護者説明会③

令和5年7月23日（日）～8月26日（土）：研修プログラム実施



⑤行程表

	日付	都市名	時間	交通手段	スケジュール	食事			
						朝	昼	夕	
1	7/29 (土)	中部空港	14:00頃	CX539	中部空港集合	朝	昼	夕	
		中部空港発	16:15		空路、香港へ	×	×	機	
香港空港着	19:30	到着後、飛行機乗り継ぎ	(機内泊)						
2	7/30 (日)	香港空港発	00:20	CX105	空路、メルボルンへ				
		メルボルン着	11:15	専用車	到着後、専用車にてホームステイ先へ ホームステイ開始	機	×	F	
<p>「ビクトリア州私立現地校プログラム (4週間)」</p> <p>■現地校プログラム 1校あたり約5・6名</p> <p>■ホストファミリー宅から各自通学 ファミリーによる送迎、スクールバス利用、公共交通機関利用、徒歩等、通学方法はホストにより異なります。通学費は自己負担となります。</p> <p>■ホームステイ (原則 1-2人1家庭) ※他の留学生と一緒にいる場合がございます</p> <p>■大学セッション 在籍学生によるセッションを行います。(計1回)</p> <p>■週末はホストファミリーと過ごします。</p> <p style="text-align: right;">【ホームステイ】</p>									
3 ~ 28	7/31 ~ 8/25 (金)	メルボルン					F	○	F
29	8/26 (土)	メルボルン	夕方	専用車 CX178	空港に移動、チェックイン手続き				
		メルボルン発	23:50		空路、香港へ	(機内泊)	F	F	×
30	8/27 (日)	香港着	6:55	CX536	到着後、飛行機乗り換え				
		香港着	10:10		空路、中部空港へ	機	機	×	
		中部空港着	15:10		到着後、解散				
<p>この旅程は、2023年2月現在予定されているキャセイパシフィック航空の運航スケジュールに基づいて作成しています。 以後スケジュールに変更があった場合には、上記旅行日程が変更になる場合があります ※ご利用予定航空会社・・・キャセイパシフィック航空 (CX) ※食事条件用語の説明・・・F:ホストファミリーでの食事、○:バックランチ、機:機内食、×:含みません ※飛行機の予約は完了していません。予約状況によって利用航空会社、日程が変更になる場合がございます。</p>									

Before heading to the school trip, as part of my studying abroad program, I researched the history of Australia. In the course of this exploration, I encountered the term “White Australia Policy,” referring to a policy that aimed to exclude people of color. For someone like me, whose image of Australia was limited to koalas and kangaroos, this term was incredibly shocking. I was anxious about whether, as an Asian, I would be accepted.

However, the reality I experienced was very different. In Melbourne, Australia, where I visited, people of various races coexisted. Walking through the city, greetings were exchanged irrespective of race, nationality, gender, and, at school, various languages such as Arabic, Vietnamese, and Chinese, in addition to English, were heard. It was truly a multicultural society. Over the span of half a century, how much had the landscape of Australia changed? The facts stirred my emotions, and I became deeply interested in the reasons behind this transformation—why and how it became possible. It was during my time at the local school that two events occurred, which I believe hold the answers to my question.

One day, having noticed that someone I met at school resembled my favorite K-pop idol, I approached them and said, “You’re slim and cute. Are you doing any training? If you don’t mind, could you share?” The person seemed somewhat bewildered, offered a brief response, and promptly left the site. It was later that I learned from my other friends that expressions about physical appearance, such as “you’re slim and cute,” are considered impolite in Australia. When complimenting someone, it is more common to praise aspects like their personality or interests rather than its physical attributes. This difference in praising others’ appearances is a unique aspect in the multiculturalism world. Praising external appearances implies, conversely, a lack of acceptance for other external features. That is, this choice of words may have arisen from the historical circumstances of Australia. Since gaining this insight, I’ve made a conscious effort to focus more on a person’s qualities, identity, and character rather than their appearance. The second event occurred when I accidentally boarded the wrong bus from school to my homestay family. Dropped in an unfamiliar place, I was at a loss. However, many people approached me, offering assistance, guiding me to the correct bus and ensuring I reached my homestay family safely. Later, when I asked about their kindness to my

homestay family, they explained that their understanding had deepened over time due to the interactions of people immigrating from various countries, creating a community where a diverse range of races, including those from Asia, Europe, and the Americas, coexists.

It is because of individuals who understand and embrace diversity, possessing a broad perspective, that such transformations occur.

Australian Classes

オーストラリアコース

ITO Yumeka (高校2年国際教養科)

I participated in a one-month study abroad program in Australia. From this experience, I gained the impression that Japan is behind in terms of diversity. In this one-month experience, I felt that Australia is a place that embraces diverse cultures, fostering a rich understanding of different cultures. In Australian schools, there are frequent multicultural exchange events where students from various countries wear ethnic costumes and have opportunities to engage with different cultures. Australia, being originally a nation of immigrants, has a population with diverse cultural backgrounds.

In contrast, Japan, rooted in history and tradition, has a relatively homogeneous social structure. However, in recent years, with an increase in foreign tourists and workers, diversity has been on the rise. While Australia widely accepts linguistic and religious diversity, and people with different backgrounds are respected in public spaces, Japan tends to maintain a relatively homogeneous social structure where adapting to Japanese culture and social customs is generally expected of foreigners living in the country. There are significant differences in culinary culture. Japan is traditionally known for dishes like sushi, sashimi, and ramen, whereas Australia embraces a wide range of cuisines including barbecues, seafood, and dishes from various countries. During my training in Australia, I was surprised that most meals in my homestay were meat-based, without staples like rice or bread. This challenged my preconception that rice is essential, having lived in Japan for 17 years.

Religious practices, festivals, and holidays also reflect cultural diversity. In Australia, Christianity is a major religion, but people with different religions and belief systems coexist. Additionally, the cultures of Aboriginal and Torres Strait Islander peoples are

important elements.

There are significant differences in the education systems as well. In Australia, individual needs and abilities of students are respected, and self-expression and critical thinking are emphasized with common interactive teaching methods. In contrast, Japanese education traditionally values discipline and teacher-centered, one-way instruction, emphasizing group learning and cooperation.

These diversity differences shape unique aspects of each country's society and culture, affecting coexistence, education systems, and work environments. Currently, my impression is that Japan lags behind Australia in many aspects. While diversity in terms of race, gender, and LGBTQ has only recently begun to be accepted in Japanese society, criticism and discrimination may still be encountered. However, in the future, accepting and deepening mutual understanding of diversity is essential. I believe that in order for everyone to live peacefully, it is important to accept diversity and move forward together.

What We can Learn from "G'day mate!"

オーストラリアコース

MATSUURA Soma (高校2年国際教養科)

Greetings are insignificant words. Yet, during my time here in Japan, I have never thought about the meaning of greeting in my life. Even though greetings are a simple task, many young people in Japan tend to disregard them. Conversely, elderly people, shaped by strict education, often hold greetings in high regard. One might wonder whether the younger generation, particularly the "yutori generation", has lost sight of the essence of greetings, or if it's a result of the education they received. In other words, those who have received a well-rounded education tend to value greetings. However, it's not merely a matter of educational differences; I believe many have simply forgotten the significance of greetings.

Have you ever considered the meaning behind greetings? Of course, there is always meaning. However, interpretations vary, and it's not easy to definitively pinpoint the true intent. Having lived in Australia, I found myself contemplating the meaning of greetings daily, especially during my time on the school bus. Every morning, my host mother would say "Good morning" in English and even inquire about how well I had slept. This routine continued for a month. Initially, I questioned why she repeated the same phrases like a template, but I never felt any ill will. Instead, I admired the

thoughtfulness displayed in such subtle gestures. Even my host siblings, with sleepy faces, would greet me in passing. I held genuine respect for my entire host family. Had I been in their shoes in the morning, I would likely have succumbed to the temptation of a second round of sleep, lacking the composure to greet others.

Even in Japan, I only manage to exchange greetings when there's a moment of calm upon waking. Whether with family, friends, or teachers, I rarely initiate greetings unless prompted. This tendency stems from a slight indifference towards others and the influence of being too accustomed to certain situations. Rather than a sense of affinity, what we need is not acquaintance but accustomed situations. Greetings are essential in relationships where a sense of affinity has already been established. Nevertheless, for this habit to endure, it must hold some meaning.

As mentioned earlier, let's explore the meaning of greetings. By contrasting the cultural spheres, national characteristics, and events of Japan and Australia, two distinct viewpoints emerge. First, let's focus on Japan. Japan boasts an established cultural sphere, unique to the nation and still thriving. It has a very long history established by only one tribe. There was a period of time called "isolationism" in which we only did trade with a few western countries. In contrast, Australia is a multicultural nation, fostering coexistence among diverse cultures. While valuing the culture of Aboriginal minorities, Australian culture takes precedence. Now, let's consider the national characteristics of each country. I think that Japanese individuals tend to erect barriers against others, lacking mutual respect and understanding. This self-centeredness results from insufficient understanding, creating communities based on individual perspectives. Whereas in Australia, coexistence is an absolute necessity to be a multicultural nation. Without mutual respect and understanding, living together in society becomes challenging. It seems that critical individuals might find themselves isolated. Thus, approaching others with kindness is considered a crucial first step in Australia.

Through this comparison, it becomes evident that Japan and Australia exhibit contrasting tendencies. Japanese people often appear self-centered with limited consideration, while Australians are consistently sociable, valuing their approach towards others. From this perspective, it becomes apparent which approach is more desirable for society.

For Japanese individuals, greetings often follow a template, lacking genuine concern for the other person. However, it's precisely because of this genuine concern that one can treat others with kindness. This is my interpretation and also the impression I have of Australians from the experience of studying abroad. Nevertheless, since there is

meaning, and people do not engage in actions without understanding, I believe greetings are justified. Although greetings are just seemingly insignificant words, they represent a fundamental aspect of communication. It is through this initial step that new relationships and encounters can blossom. Greetings, much like the introductory exchanges with a host family, are an indispensable prelude to all aspects of life. Without this, no communication can truly begin.

⑦ 講評

この中高一貫5年生（高校2年）の担任として、今回の国際理解研修の実施は特別な意味を持っていた。なぜなら、彼らが中学2年生の時にCOVID-19の流行のため、本校で計画されていた国際理解研修ロンドン・パリコースが中止になった経緯があるからだ。つまり、彼らにとっては初めての海外研修となった。中には家族で海外旅行に出かけたことがある者もいたが、自分の力だけで海外へ渡り、さらには1ヶ月間のホームステイを経験するという事は、彼らにとって新しい挑戦であった。

経験のない状況に彼らを導くことに対する不安もあったが、実際に日本に帰ってきた彼らの表情を見ると、その心配は杞憂であったことがわかった。彼らの顔からは、自身が追い求める夢に向かって、自己を高めることができた充実した時間を感じ取ることができた。これを通じて、彼らが未知の状況に果敢に挑戦し、それが成長につながったことを確信した。

引率教員 大西康介

⑧ 活動の様子



Geelong Lutheran Collegeでは1カ月現地生徒とペアになってそれぞれ動きました。



週1回は現地のカウンセラーと一緒に過ごし、悩みや相談事をする日になっていました。



Melton Christian Collegeでは1週間ほど電子機器を一切使用しないキャンプに参加しました。



キャンプでは災害時の身の守り方を学び、写真では身の回りにあるもので暖を取る方法を教わっています。

[2] ベトナム・カンボジア (令和5年8月16日(水)～8月23日(水) 1週間コース)

①研修の目的

カンボジアでは、現地の小学校への訪問、コンボンブルック村でのフィールドワークを通じて異文化理解を主とした課題研究、マングローブ(名古屋国際の森)植樹やアンコール遺跡群の修復体験等も実施する。また、ベトナムでは、ベトナム戦争に関する平和学習や現地学生との交流や日系企業訪問等のプログラムを行い、多様な側面からさまざまな社会課題を視野に入れ、その課題解決の方法を考察することを目的とする。

②対象生徒

高校2年(普通科中高一貫クラス、普通科グローバル探究クラス、国際教養科) 38名
引率教員：2名

③活動内容について

【ベトナム】

- (a) 現地高校生との交流：グループごとに現地高校生1名と共にベトナム市街のフィールドワークの実施
- (b) 日系企業訪問：①企業概要の説明 ②工場見学 ③質疑応答
- (c) 平和学習：①クチトンネル見学 ②統一会堂、戦争証跡博物館見学
- (d) 現地工場見学：はちみつ農園・ココナッツキャンディ工場見学

【カンボジア】

- (a) PBL学習：コンボンブルック村にてテーマ別グループフィールドワークの実施
- (b) ユネスコ活動及び海外協力活動事業の理解：日本政府及びカンボジア作業員の方とバイヨン寺院遺跡修復活動
- (c) 現地市場見学：オールドマーケット及びプサー・ルーの見学
- (d) 現地小学校訪問：バンテアイスレイ小学校にて日本文化や遊び、スポーツをテーマとした交流を行う。コンボンブルック村でのPBL学習との比較調査をしたグループも有り。

④研修の主なスケジュール

令和5年4月22日(土)：生徒・保護者説明会①

令和5年5月19日(金)：生徒・保護者説明会②

令和5年7月21日(金)：生徒・保護者説明会③

令和5年8月16日(水)～8月23日(水)：研修プログラム実施



⑤行程表

日次	月日(曜)	地名	現地時間	交通機関	日程	食事
1	8/16 (水)	中部国際空港発 タワシコヤト国際空港着 タワシコヤト国際空港発	10:00 13:45	VN0341 専用車	ベトナム航空にて出発 ホーチミン到着、入国手続き、専用車にて市内へ移動 現地学生でB&Sプログラム(5~6名1グループ) 研修後、フードコートにて各自ご夕食 ＜ホテル泊＞	朝：－ 昼：機内 夕：－
2	8/17 (木)	ホーチミン	午前 午後	専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 午前：日系企業訪問 研修後、ホーチミン市内にて昼食 午後：スイデンパーク散策 研修後、レストランにて夕食(フレンチ料理) ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
3	8/18 (金)	ホーチミン	午前 午後	専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 午前：クチトンネル観光 研修後、ホーチミン市内にて昼食 午後：ホーチミン市内観光 (統一会堂、戦争証跡博物館、サイゴンスカイデッキ展望台) 観光後、夕食(サイゴン川ディナークルーズ) ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
4	8/19 (土)	ホーチミン タワシコヤト国際空港着 タワシコヤト国際空港発 シエムリアップ 国際空港着 シエムリアップ 国際空港発	終日 16:45 18:45 19:50	専用車 VN0815 専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 ミーヌン川クルーズ (船上上陸後、蜂蜜農園・ココナッツキャンディ工場視察) その後、小舟にてジャンクルクルーズ 昼食：ベトナム郷土料理 観光後、空港へ移動。 ベトナム航空にてカンボジアへ シエムリアップ到着 到着後、夕食(カンボジア料理) ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
5	8/20 (日)	シエムリアップ	終日	専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 コンブンブルック村にてフィールドワーク ・家庭訪問、浸水林ポートクルーズ、フィールドワーク、記念植樹 ※昼食は、トンレサップ湖水上レストラン ※夕食(カンボジア料理とアサランダンス鑑賞) ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
6	8/21 (月)	シエムリアップ	午前 午後	専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 午前：バイヨン寺院遺跡修復活動と見学 レストランにて昼食(中華料理) 午後：オールドマーケット等散策 散策後、レストランにて夕食(西洋料理) ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
7	8/22 (火)	シエムリアップ シエムリアップ 国際空港着 シエムリアップ 国際空港発 タワシコヤト国際空港着	午前 午後 18:45 20:45 22:10	専用車 VN0814	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 午前：パンテアイスレイ小学校訪問とパンテアイスレイ遺跡観光 レストランにてカンボジア料理 午後：アンコールワット観光 観光後、レストランにて夕食。夕食後、空港へ 空港到着後、出国手続き ベトナム航空にてホーチミンへ ホーチミン到着 ＜機内泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
8	8/23 (水)	タワシコヤト国際空港発 中部国際空港着	00:05 07:30	VN0340	ベトナム航空にて日本へ 日本へ到着	朝：機内 昼：－ 夕：－

⑥生徒報告書

3カ国(ベトナム・カンボジア・日本)の水質調査の結果と考察

ベトナム・カンボジアコース

三輪百合香（高校2年国際教養科）

以前ヨーロッパを旅行した際に安全だと言われていた現地の水を少量飲んでみたところ酷くお腹を壊したことがあり、当時の経験から「水は安全な飲み物ではない」と感じてしまった。海外に行った時は必ず水のペットボトルを購入して飲むようにして、今回の研修でも現地の水は私にとって不安要素でしかなかった。実際、国際理解研修で訪れる地域は発展途上国と言われており、カンボジアのコンボンブルック村はかなり貧しい村であると事前に聞いていた。

水は人間が生きていく上で必要不可欠のものであり、洗濯や入浴は勿論、食事を通して体内に経口摂取される。ベトナムやカンボジアの水は一般的に安全ではないと言われていたとはいえ、現地の人は実際に現地の水を使用して生活しているため、今回の研修で現地の水質を調査して安全性を確認したいと考えた。それと同時に、私達が普段使用している日本の水やベトナム・カンボジアなどの飲めないと言われている水は何処が違うのかを調べてみようと考えた。

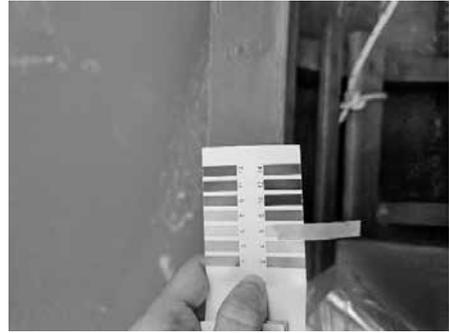
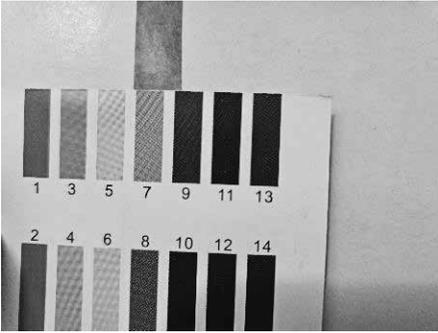
水質調査にあたっては、専門の精密機器や高額な検査薬は入手困難なため、身近にある検査薬や人間の視覚、嗅覚などを使ってベトナム・カンボジアと日本の水の比較をすることにした。

仮説としては、以下の通りである。

1. 貧困地域では経済的な問題により、安全でない水も飲料水として使用されているか。飲むとなると周囲が川や湖なので、井戸水などではなく川や湖の水を直接汲んできて飲んでいるのではないか。
2. 酸性雨がベトナムやカンボジアでは問題になっているため、現地の水の成分は酸性に傾くのではないか。

上記の仮説を踏まえて、ベトナム・カンボジア・日本の水道水と川の水や各国の水道水、市販の水をそれぞれ視覚と嗅覚などを使い観察し、さらにpH試験紙にそれぞれの水を浸してpH濃度を化学的に検査した。結果は下記の通りである。

国	種類	色	臭い	pH	性質
日本	水道水	透明	無臭	5～6	弱酸性
	飲料水	透明	無臭	7～8	中性
	木曾川	透明	無臭	5～6	弱酸性
ベトナム	水道水	透明	無臭	5～6	弱酸性
	飲料水	透明	無臭	7～8	中性
	メコン川	黄土色	生臭い	5～6	弱酸性
カンボジア	水道水	透明	無臭	5～6	弱酸性
	飲料水	透明	無臭	5～6	弱酸性
	トンレサップ (コンボンブルック村)	黄土色	生臭い	5～6	弱酸性
	アンコールワットの水	深緑色	生臭い	5～6	弱酸性



ベトナムもカンボジアも、現地の人は弱酸性の水道水を普通に飲んでいて、川や湖の水を飲んでいる人は見かけなかった。また、ペットボトルの水を飲んでいる人を見ることもなかった(経済的な理由だと考えられる)。現地ガイドの方のお話では、衛生面が危険なので川も湖の水も飲料水には適していないとのことであった。

pHの値に着目すると、全体的に見て検査した日本の水もベトナムやカンボジアの水もpH 5～6で検査値に違いがなかったことから、私達が訪れた地域では水に関しては自分が考えていたような酸性雨の影響を強く受けているという結果は得られなかった。しかし、現地で実際の水質を見てみると、色も濁っており、匂いも臭く、飲料水や生活用水としては適していないことが確認できた。しかし現地の人々はこのような水質環境の中で育った魚などを食べているため、彼らの安全面や健康面は大丈夫なのかと新たな不安要素が出てきた。普段から川や湖で捕まえた魚を食べている現地の人々の生活状況を鑑みても、水質改善はやはり今後の課題である。研修での経験を通して、水質が間接的に与える彼らの健康への影響を今後考えていきたい。

『音楽には国境はない』とはよく言ったものだが、やはりその国々での特色はあり、未だ謎に包まれている部分は山ほどある。このような我々の知らない文化を探るために筆者は旅をする。来たるべき第一作目はベトナム・カンボジアを舞台にした国際理解研修から書き綴る。正直書ける内容は腐るほどあるが今回は音楽をベースに国自体の様子を交えて書いたため、音楽好きの方には是非読んで頂きたい。

In Vietnam

①現代音楽ができるまで

約6時間飛行機に揺られ到着したホーチミンは思ったより都会で、劇場やホールも存在するほどとても発展している様子であった。これは遡ること約70年前、ベトナム南北分断期に南ベトナムで流行していた「黄色い音楽」が大きく関係している。南北統一後、ベトナム社会主義共和国は北ベトナムの政治体制を引き継ぎ、南ベトナムの歌謡は廃棄されるものとして制限されたが、国外にいた南ベトナム出身の難民は海外で故郷を想い歌い続けたため今も残っており、2010年に「ボレロ歌謡」と呼び変えられ再流行し、海外で南ベトナム時代の歌を唄っていた歌手が国内で盛んに公演を行うようになった。2018年11月には南ベトナム時代の歌謡を普及するのに必要な特別な手続きが廃止されることが発表され、これにより更なる音楽の発展に繋がった。

②民族音楽

地方や離島では各地域の民族音楽があり、ベトナムに入り早3日目に向かった離島ではマンゴーやドライフルーツ、バナナなどの特産物とともにその離島ならではの民族音楽が披露された。楽器は胡弓に似た弦楽器と笛があり華やかであった。その後、船に揺られながらベトナムの民族音楽ともに夕食を食べる。フエ宮廷雅楽はベトナム最後の王朝の古都フエの宮廷で奏でられた伝統音楽で、中華風の優雅な音色にベトナムの豊かな情緒の旋律が融合した美しく明るい楽曲は今も「無形文化世界遺産」として多くのベトナムの人々に愛されている。私個人的には日本の昔ながらの雅楽とも似た音色があったような気がして、どこか懐かしさを感じた。

③街の音楽文化

4日目に音楽好きの友達3人と先生と共に街の楽器店に向かった。どんな楽器があるのか期待していると、何やら肉のような物が吊るされており、よく見ると赤ピンクのビニール袋に包まれたウクレレだった。ギターの値段は日本円で約1762円とお得な値段設定で、別の店ではギターだけでなくバイオリンなども売っていた。ありがたいことにギターも弾かせて頂くことになり、意外にも軽く心地よい音で筆者もテンションが上がった。現

地の店主の方も慣れた様子でチューニングをしており、街の通りに楽器店が立ち並ぶ様子を見てもベトナムの人々はそれなりに音楽に触れる機会があると考えられる。筆者は松脂とギターピックを購入し、思い出の品として日本に持ち帰ることにした。



In Cambodia

①伝統音楽について

中国人やインド人の旅行者がこの地に足を踏み入れる前から、住んでいた先住民族が作り上げた文化的伝統に由来する。古典的なクメール音楽は古代の物語や神話が表現されている部分が多くあり、ヒンドゥー教の影響だけでなく古代の形式にも大きく反映されている。1970年代初頭、カンボジアのクメール・ルージュは国民虐殺を行った。それにより当時の推定約90%のカンボジアの音楽家、ダンサー、教師、楽器製作者が殺害され、文化的知識の次世代への伝達が妨げられた。それでもカンボジアは再建を続け、人々はある限り演奏、教育、研究、記録を今も続けている。しかし更なる音楽のグローバル化・発展には、音階やピッチ周波数の異なる音体系を持つ外国の音楽と競争する必要があった。カンボジアの音楽には音楽理論の正式な体系がなかったため、カンボジア人はこの音楽を西洋や中国の音楽と比較した場合、「不正確」「音程がずれている」と考えていた。あるいは「野暮ったい」という認識が広まっていた。その後カンボジアの音楽システムとその独特の伝統に関する知識を体系化する取り組みが進み、現在の形が形成された。また元々の音楽は政府の努力により伝統音楽として今も残り続けている。

②アプサラダンス

伝統音楽ベトナムからカンボジアに飛び2日目の夕食では伝統的な音楽形式の一つであるピンピートが披露された。ピンピートは宮廷や寺院で演奏されてきた儀式音楽だ。踊りは「クメールの踊り」「歓迎の踊り」「ココナツダンス」「メカラダンス」「漁師の踊り」「アプサラダンス」の5つで構成されていた。クメールの踊りは12世紀に舞い降りてきた神インドラによって、ジャヤヴァルマン2世にカンボジアの土地とその王位と共に授けられたアプサラがクメール民に教えたとされるダンスである。ココナツダンスは生きることの喜び、そして人との調和がテーマのダンスとして人々から人気があり、南東の地方では結婚式の時に踊られている。

まとめ

今回の音楽について異国の地での見解、ヒアリングを書き綴ったが、これは筆者個人の主観に過ぎない部分が多くあるため、その文化に触れるためには自分でその地に行き、見

聞きし体感するべきである。ベトナム、カンボジア共に年々都市人口の増加が見られ、さらなる音楽の新たな進化が期待できる一方、農民人口の減少に伴い、古き良きものとして古典音楽が廃れず、残され続けることを祈る。

⑦ 講評

昨年に続き国際理解研修ベトナム・カンボジアコースに携わることができたが、今回の研修は昨年と比べて大きく条件が異なっていた。大きな違いの1つは参加人数の増加である。昨年度の評判やプログラムの満足度が高かったため、今年度は昨年度の3倍以上の生徒が参加することとなり、その分集団行動の大変さを痛感することとなった。人数の多さを考慮して計画段階で内容や時間を調整したプログラムもいくつかあるが、それでも思うようにいかず教員も現地で悩む部分が多くあった。

とはいえ、昨年のConnectEd 2023にて、私は以下(下記スライド参照)のように本研修を振り返っており、下記の言葉通りに前回から研修内容もいくつかアップグレードされた。

本研修によって生徒たちの「～したい！」の言語化と実現ができた。太字の吹き出しは実際に現地でお願ひしてみても叶えることができた内容である。残りの吹き出しは残念ながら叶えることができなかったため次年度に叶えることにしたい。



今年度から新しくプログラムに追加されたスイティエン公園やトゥクトゥク乗車、そしてフィールドワークでの投網漁体験は、昨年の経験に加え今年度参加した生徒たちの「～したい！」を引き出すことができたからこそ実現した。また、冒頭に書いたように今回の参加生徒は38名ということで、現地での「～したい！」の数は昨年とは比べものにならない程だった。実際、生徒たちが教員を介さずに現地の人とのコミュニケーションだけで勝手に実現させてしまったこともあったらしい(教員側は後からその事実を知る上に勝手に完結してしまっているの、驚くことしかできないのだが……)。

彼らのその場の“ノリ”で、オリジナリティに富んだ研修にいくらでも変えられるという点は本研修の大きな魅力である。来年度も生徒たちのさまざまな「～したい！」が溢れる研修になることを期待したい。

引率教員 後藤彩可

⑧研修時の様子







[3] シンガポール・マレーシアコース(令和5年7月26日(水)～7月30日(日)1週間コース)

①研修の目的

未来の国際人として、海外の生活や文化を体験し、国際的な視野に立って、物事を考える態度を養う。また、多国籍の人との交流を深め、積極的にコミュニケーションできる力を身につけること。

～国際理解研修におけるテーマ～

- 異文化理解と交流
- 多国籍国家における食文化
- シンガポール・マレーシアが抱える社会問題とその対策

②対象生徒

高校2年（普通科中高一貫クラス、普通科グローバル探究クラス、国際教養科）16名
引率教員：2名（学校長・高校2年担任）

③活動内容について

- ・マレーシア ジョホールバル近郊の村にてホームビジット体験
- ・世界大学ランキング19位であるシンガポール国立大学
→授業体験、キャンパスツアー
- ・シンガポールの水に関する技術見学
→ニューウォータービジターセンター、マリーナバラージ

④研修の主なスケジュール

- 令和5年4月22日（土）：生徒・保護者説明会①
- 令和5年5月19日（金）：生徒・保護者説明会②
- 令和5年7月21日（金）：生徒・保護者説明会③
- 令和5年7月24日（月）：最終説明会
- 令和5年7月26日（水）～7月30日（日）：研修プログラム実施

⑤国際理解研修後の活動

- (1) 報告書の作成：個人テーマの内容をまとめレポートの作成
- (2) 研修報告会で、調査報告のプレゼンテーション発表



⑥行程表

日程	発着地／滞在地名	現地時間	交通機関	適用	食
7/26 (水)	中部国際空港(着)	8:00	SQ671	集合 空路、シンガポールへ	×
	中部国際空港(発)	10:30			
	チャンギ国際空港(着)	16:50	専用バス	到着後、ジョホールバルへ	機 夕
	ジョホールバル(着)			ジョホールバルのレストランにて夕食 (中華料理 or マレー料理) 夕食後ホテルへ 【GRAND PARAGON 泊】	
7/27 (木)	ジョホールバル(滞在)	AM	専用バス	ホテルにて朝食 ホームビジット体験(5～6名1家庭)セメンチュウ村 歓迎式、油椰子収穫見学、ゴム園見学 昼食(各家庭にてマレー料理) ジョホールバル市内観光 王宮/外観、マレー文化村、アプバカル寺院など シンガポールへ ホテル着 到着後徒歩にてフードコートなどで自由食 【VOCO ORCHARD SINGAPORE(旧 Hilton Singaporeor)泊】	朝 昼 ×
	シンガポール(滞在)	PM			
7/28 (金)	シンガポール(滞在)	AM 14:30	専用バス	ホテルにて朝食 シンガポール国立大学研修プログラム(ウーズム・文化・科学から選択) シンガポール国立大学の学生とキャンパスツアー(2時間) (5～6名に1人大学生)+学食にて自由食 注① 環境学習 マリーナバレー人工貯水地見学 市内観光 マラーイオン公園、チャイナタウン、アラブストリート ショッピングモールにて自由食 マリーナベイサンズ展望台より夜景観賞 ホテルへ 【VOCO ORCHARD SINGAPORE(旧 Hilton Singaporeor)泊】	朝 ×
7/29 (土)	シンガポール(滞在)	AM PM	専用バス	ホテルにて朝食 ニューウォーターピクチャーセンター見学 センターサー島班別行動(自由昼食) 入島料込/各施設入場料は各自払い ナイトサファリ観光(日本語トラム利用) 夕食(ナイトサファリ内ブッフエ) 空港へ 【機内泊】	朝 ×
	チャンギ国際空港(着)	23:00			
7/30 (日)	チャンギ国際空港(発) 中部国際空港(着)	1:20 8:40	SQ672	空路、日本へ 到着後、解散	機

⑦生徒報告書

『シンガポール・マレーシアの価値観及び日本との生活基盤の違い』

～この研修を経て今後どうするべきか～

シンガポール・マレーシアコース

荒川星那（高校2年普通科）

私はシンガポール・マレーシア国際理解研修を終えて日本との価値観の違いと生活基盤の違いを強く感じた。このように感じた理由は以下の通りである。

マレーシアのセメンチュ村の家庭を訪れた際に、猫が家の中にいた。現地ではペットとして意識的に飼育するのではなく、あくまでも住み着いている“家畜”に近いものを感じた。猫用の“餌皿”らしきものはなく、水飲み用の皿もない。猫が何か悪戯をするものなら頭を強く叩いていた。何が問題であるかという、マレーシアでは頭は神聖なものとしてされており、子供に対してですら撫でることはない部分である。つまり基本的に他者が触れることがない神聖な部分を強く叩くということは猫のことを同格とは思わず、格下だと思っていることが伺えた。そして少なくとも“愛情の籠った叱り方”ではないと感じた。また現地で6～8歳くらいの少年が子猫を私たちに见せるために連れてきたのだが猫の平衡感覚を保っている猫髭が切れており、見る限り何か刃物で切られたような断面をしていた。そしてその少年は子猫を宙へ投げキャッチしたり二足歩行をさせようと前脚持って歩かせたりなど様々な猫との戯れを見せてくれた。まだ幼い少年の過ち、いや本人の認識とすれば“悪戯”に近いのだろうか。日本であればいずれにせよペットとして飼育している猫であれば飼い主がそのような行為を断じて許さないであろう。また、野良猫であってもあえて捕まえて家の中に入れたり、上記で述べたように“悪戯”をしていたら保護者が黙ってみてはいないだろう。従って、彼らにとって猫とはあくまでも住み着いている“家畜”に過ぎず、人間同等とまではいなくても、ペットとしても愛情を注いでいるわけでないということがうかがえた。

次に食事に関してだが、食事は基本的にスパイスやハーブが使われた料理がよく食べられており、この日もスパイス系の味付けが付けられた食事であった。この食事と共に提供された飲み物に価値観の違いを強く実感した。マレーシアでは有名な飲み物として“テ・タレ”という紅茶があり、それはミルクティーの一種であり有名



なものである。それが出てくるのであれば観光客に対して、「もてなしたい」という意識から普段とは違う飲み物を意図的に出していたということが推測できるが、実際に提供されたものはミルクティーではなく、何か色のついた飲み物であった。この飲み物は、お祭りなどでかき氷にかける“シロップ”を薄くしたものと同様の味がするのであった。スパイス系の料理に対して飲み物を出すのであれば、日本であるならば水やお茶、インドなどの香辛料を多く使う国ではミルクティーやチャイなどが妥当であるが、この国では実際に出てきた飲み物はスパイス系には合わない“シロップ系”の飲み物であった。つまり、彼らにとってシロップ系の飲み物は日常における必需品であって、私たちがいうところのお茶に該当するのかもしれない。もしくは彼らの国の水道水が十分に殺菌されていないことから、水を毎日飲むように何か殺菌を施したものがシロップ系の味がするのかもしれない。この予想は早々に間違っていると気付かされた。部屋の奥にウォーターサーバーがあり水をデリバリーしてもらっていることがわかった。また、現地の人たちによるとデリバリーしてもらうのはごく少数派で、基本的には蛇口にフィルターをつけて水を使用しており水の味に違いはないということであった。よって何かの殺菌の効果で甘くなっているのではなく、意図的に出された飲み物であることがわかった。このことから、この飲み物は私たちが日頃からよく口にする、日本文化の象徴でもある“お茶”と同等のようなもので、彼らにとって“シロップ系”の飲み物は日常における必需品であり、スパイス系の料理にあうものであることが伺えた。ホームビジット体験をしてもらう上でより日常に近い生活を体験して欲しかったと言う気持ちから水ではなく、おもてなしのコーヒーや紅茶ではなくあえてこの飲み物が出された可能性もあるが真相はわからない。

以上のことから、猫の件に関しても食事の件に関しても私が育ってきた価値観からは大きくかけ離れており、このような気づきは日本を離れ、他国に赴き、実際に肌で感じなければ気づくこともできない事であった。味覚に関しては、世界共通で美味しいものは美味しく、料理にあう飲み物も決まっていると思いついでいた。今までの人生においても、食事に合わない飲み物を人に提供する際には、伺いを立ておりそのように育ってきたのである。よって、この日頂いた料理には決して合うとは言えなかったこの飲み物に対して、価値観の違いを感じてしまったのかもしれない。そもそもが料理に合うか合わないかを考えて提供していないかもしれないし、この点に関しても日本の「おもてなし」とは大きく異なっているのではないだろうか。今回の研修は、価値観の違いと生活の違いを改めて深く考える機会となった。このような体験を経て今後は「真のおもてなし」とは何かを考えながら生活をしていきたい。

「シンガポールは多国籍国家である。」その印象が私の中には非常に強くあったものの、“英語圏なのだからアメリカ合衆国とあまり変わらないのではないか、“シンガポールには中華系の人が多く7割を占めるらしい”など、どこかシンガポールは日本とそれほど繋がりのない国だと認識していた。海外渡航経験の乏しい私にとって、“日本と外国”と二分化して考えていたのかもしれない。それでも、やはりネットを通して見る海外は日本と違って感じるように感じた。スーパーマーケットでまばらに置かれた果物、店の料理の量の多さ、どれも目新しく、私にとっての外国であった。

感覚的に初めて、海外に渡ったのは、マレーシアの街並みを見たときだろう。日本では見たことのない独創的な形をした建物や植林の違いを発見し、“日本ではないどこか”を体感した。やっと外国らしさを感じた、と思いきや、突然見慣れたものが視界に入った。それは、行き交う車である。ぼんやりと外を眺め、隣を通り過ぎていく車に目を移した時、見覚えのあるエンブレムがついていた。そこで、シンガポール・マレーシアにはトヨタ、日産、ホンダ、スズキなど日本車が非常に多いことに気がついた。もちろん、外国車もあったが、およそ8割は日本車だったと感じた。また、日本に馴染みのある石油会社である、シェルのサービスステーションがマレーシアにもあった。シェルは日本の会社ではなくオランダとイギリスの企業ではあるが、私が幼い時から身近にあったサービスステーションを発見した時は、とても驚いたし、外国を身近に感じた。これが、シンガポールとマレーシアの中には日本が広がっているのだと初めて気づいた瞬間だった。

次に気がついたのは、2日目の夜にフードコ



ートからの帰り道でスーパーマーケットに立ち寄った時である。先述の通り、私はスーパーには英語で書かれた商品が並んでいて日本食を恋しく思うものだと考えていたが、実際は全く違っていた。一步入った途端目に入ったのは、日本食コーナーだった。日本の調味料やお菓子などがたくさん置いてあって、初めは驚きと喜びがあったが、ドリンクコーナーに行った時にも日本の飲料が半分を占めていることに少しの失望もあった。せっかくの海外研修なのに、“日本らしさ”を感じ過ぎてしまっただけでは、期待していた分失意に満ちても仕方がないのではないだろうか。シンガポールは多国籍国家ということもあり、フードコートやスーパーマーケットでも様々な国（特にアジア）の料理が多かった。しかしシンガポールで食べる日本食は、日本で食べる時と同様ではなかった。そもそも注文を英語で行うこと、若干の味の違いがあること、使っている具材が違うことなど、細かくはあるが日本から出たことのない私からすれば大きな違いだった。

一方、日本ではあり得ないことも発見したので紹介しようと思う。まずは、マレーシアの外国らしい街並みについてだ。言葉で説明するよりも写真を見た方が早いので、一度見てほしい。2枚目の写真はマレーシアをバスで移動している時に撮ったものだ。ブロックのようにでこぼこした形で、遊びごころのあるおもちゃのような建物が、マレーシアにはたくさんあった。バスガイドの方いわく、シンガポールやマレーシアには地震がないため、耐震性が備わった建物である必要はないとのことだ。文化以外にも地理によって街の景色が変わっていることにとっても興味を惹かれた。3枚目の写真は、同じくマレーシアをバスで移動しているときに撮ったのだが、日本では見られない飾り付けのしたある門があった。これは宗教や文化が関わっていて、中華街の近くには中華系の装飾がなされた門



があり、他には西洋の建築方法をもとに作られた門もあると、バスガイドの方が言っていた。似たような装飾のされた歩道橋も道中発見したが、伝統と現代らしいおしゃれなスタイルが調和していて、非常に橋を渡りたい気持ちにかられた。

次に感じた違いは、マレーシアのセメンチュ村での体験だ。各家庭に分かれ、マレー文

化を直に体験したのだが、普段着、食事方法、家、遊び、全てが日本と離れたマレーシアの独自の文化だった。女性は一枚の薄い布で体を覆い、髪の毛も布で隠すのだが、想像より暑さを感じず、髪の毛を覆うことは日本人にとって慣れないため違和感があったが、意外にも快適だった。また、日頃私たちが学んでいる英語がほとんど通じなかったことにも驚いた。お互いに英語が第一言語ではなく学ぶ立場であることから、簡単な英単語やマレー語を駆使して会話したことは異文化交流において、とても重要な意味を持っていると考える。

初めての海外に渡り、新鮮だったこと、意外と日本と同様であったこと、日本ではありえないことなど様々な発見ができたことでとても有意義な研修となった。さらに、異文化を肌で体験し、様々な人と出会い、交流できたことは、私にとっての外国という世界をさらに具体的かつ現実的に捉えることに繋がった。自身の持つ世界、外国に対する固定観念のようなものが一層広まっていくことは自分自身を好奇心に満ちさせるのだと、改めて体感した。また実際の異国に広がる日本は、私にとって“外国”という未知の世界にいる時に、安心感を与える慣れ親しんだもので、“外国”という高い壁を壊してくれるような存在感があった。やはり、母国の安心感というのは他の何にも変えられないかけがえのないものだ実感した。

⑧ 講評

本校の在籍生徒には、英語が堪能で幼い頃から海外旅行を経験してきた生徒や、実際に日本国外で過ごしてきた生徒が多く存在する。また、COVID-19が5類感染症へと移行し、日本からの渡航者・日本人に対する各国の入国制限措置が緩和されたことにより、容易に海外旅行へ行けるようになった。特に本校の生徒は海外に対して“異国”ではなく、“日常”として捉えているだろう。そんな中、今回の研修では本当の意味での“異国”を体験したのではないだろうか。セメンチュウ村にてホームビジット先のホストファミリーと会話をし、現地の家庭料理を食べ、村を散策して、スーパーマーケットで初めてみる果物を目にして、屋台で未知の食べ物を味わって……。この研修期間中で、沢山会話に困ったことだろう。買い物の仕方に戸惑ったことだろう。道に迷ったことだろう。集団行動の中で思い通りに行かないことがたくさんあっただろう。このような苦勞をする機会が失われつつある昨今の教育の中、今回の研修では生徒にとって貴重な経験だったのではないだろうか。私自身も、このような『苦勞』を与えられる教育を行っていきたくて今回の研修を通して改めて実感することができた。

引率教員 奥村仁崇

⑨ シンガポール国立大学の様子



【7】令和5年度実践活動

令和5年度の本事業の活動として、教科教育や総合的な探究の時間、学校設定科目、特別活動、部活動など多様な活動を積極的に実施した。その中でも、学校設定科目であるWWL特論での企業との交流や事業連携校とのイベントの実施、部活動のさまざまな活動などWWLに関係する特徴的な活動を紹介する。

詳細に関しては、次ページ以降に記載されている。

[A] 学校設定科目WWL特論

WWL特論 I（高校2年生・選択科目2単位）：企業との交流や事業連携

- ・アサヒ飲料株式会社
- ・株式会社矢場とん
- ・株式会社Olive

[B] 高校生国際会議（奈良県）

令和5年度高校生国際会議（奈良県）への参加

（主催）奈良県教育委員会、奈良県立国際高等学校、高校生国際会議生徒運営委員会

[C] 全国高校生フォーラム

2023年度全国高校生フォーラムへの参加（東京都）

（共催）文部科学省、国立大学法人筑波大学

[D] メタバースを使用した東海テレビ放送株式会社との協働イベント開催

東海テレビ放送株式会社が本校のメタバース空間において、アナウンサーやディレクターなどのテレビ局関係者と本校や他の連携校生徒とマスメディアに関する様々なテーマを議論

[E] Business Design Club実践報告（企業連携）

[F] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践報告（企業連携）

[A] 学校設定科目—WWL特論—

(a) 地元企業と連携する。

1. 実施時期：①令和5年4月～7月計8コマ ②令和5年9月～10月の計10コマ
2. 対象生徒：普通科グローバル探究クラス16名
3. 授業者：河合航輝（理科）
4. 連携先：①アサヒ飲料株式会社 ②株式会社矢場とん
5. 指導過程：企業協同学習は1学期にアサヒ飲料株式会社と、2学期に株式会社矢場とんと連携した。

アサヒ飲料については、テーマを（1）地元あいちに根ざした商品開発を行う、（2）二酸化炭素を吸収する自動販売機をアピールする方法を考える、とした。

テーマ（1）について、発表した商品の例としては、「三河みりんレモンソーダ」「鬼まんじゅうドリンク」「かるぐるとイチジク味スムージー」であった。

発表時に感想とともに、下記表のとおり、6つの観点で評価を行った。

実現可能性（観点）	点数	全グループの平均点
コンセプト （狙いや思い、話題性）	（普通）1-2-3-4-5-6-7-8（おいしい）	5.91
味	（まずそう）1-2-3-4（美味しそう）	2.77
効果・効能 （飲むとどうなるか）	（無い）1-2-3-4（ある）	2.53
費用対効果 （材料費と値段の差）	（低い）1-2-3-4（高い）	2.57
ターゲット （誰が買いそうか？）	（不明確）1-2-3-4（明確）	2.80
競合（同じドリンクはありそうか？）	（ある）1-2-3-4（ない）	2.95

テーマ（2）に関して、アサヒ飲料株式会社が主催で行われた令和5年8月23日のイベント（本校の部活動SDGs未来倶楽部Sus-Teenが出展）で、自動販売機についてある生徒が考えた次のようなアイデアが紹介された。



↓(アイデア)自動販売機を擬人化したキャラクターで啓発活動を行う。



←生徒が描いたキャラクター

2学期に株式会社矢場とんと連携した。矢場とんは社会貢献活動として「矢場とんカンボジア学校建設プロジェクト」を行っている。生徒たちは、矢場とんのカンボジア便りを見たとうえで、「矢場とん社員としてカンボジアでどのような活動を行うか」を考え、企業担当者の前で発表した。提案した案の例としては、「矢場とん汁を現地で振る舞う」「カンボジアの魚を使った揚げ物料理店の開業」「カンボジアで矢場とんの工場をつくる」である。

6. 企業担当者・担当教員の声

企業担当者からは、下記のような声が挙げられた。

アサヒ飲料様：「地元食材の使用は大いに評価できる」「データ分析している班は弊社で働くうえではとても有益な視点である」

矢場とん様：「提案していただいたアイデアを実際に現地で試す方向で考える」

担当教員：本授業を担当するのは本年度が1年目であるが、実際に企業連携授業を行うことで、生徒たちの可能性を広げるきっかけとなったように感じる。(河合航輝)

7. 講評

このアイデアを創出する時に、一つのキーワードがある。それは、「自分の好きなことで社会課題を解決してみよう!」というものである。社会課題解決案を考察する時に、一般的な解決を考えたり、学術的な方法を考えたりと生徒は、真面目に考えてしまう傾向がある。そうした点は重要な点でもあるが、自らの特技や趣味、学校のカリキュラムにない内容で、社会課題を解決させることも大切だと感じる。キャラクターを描いた生徒は、こうしたキャラクターを毎日描いている。人それぞれ個性があり、それを活かすことができる社会が良い。また、それができると生徒たちに気づいてほしいと思う。このキャラクターは、アサヒ飲料株式会社の担当者に見せたところ、会社の会議でも話題になったと連絡を受けた。これが「社会とつながる」ということだろうとを感じる。

(担当教員 黒宮祥男)



(b) Olive株式会社との協働プロジェクト

○連携企業：Olive株式会社

○概要：(参加者)高校2年生(29名)

(期間) 令和5年6月～令和6年3月

(場所) 名古屋国際中学校・高等学校204教室

(内容) 学校設定科目WWL特論I(2単位)『社会課題について考える』における生徒の状態(集中度、覚醒度等)の見える化体験とその活用方法についての考察

(計測内容) Webカメラ/タブレット搭載カメラに因る生徒の生体反応測定(心拍、体動)から状態を推定し、データ化する

(使用機器) Webカメラ・タブレット・携帯電話・モバイルバッテリー

(スケジュール)

令和5年6月6日(火)『感情の見える化とその活用』技術の体験

令和5年6月13日(火)『感情推定技術』を活用した社会課題への取組考察

令和5年6月27日(火) Oliveスタッフの方の複数人からの講話から見る自らの内在意識を検証

→中日新聞社による取材

令和5年9月～ 長期生体反応測定による検証を検討

令和5年9月8日(金) NHKによる授業取材(「所さん!事件ですよ」)

令和5年10月 長期測定のための検証機器設置開始

令和5年10月26日(木) NHK「所さん!事件ですよ」放映(23:00～)

令和6年1月～ 検証データのリアルタイム送信機能の検証開始

(授業の様子)



●竹内精治氏(CEO)による講話の様子

竹内氏の生い立ちや開発に至るまでの思い、システムの詳細などを複数回に渡り、講話を行った。また、Oliveのスタッフは、海外の方が多く在籍しており、そのスタッフの方々の人生やシステムに関する思いなどの講話をいただいた。その講話において、生徒自らが興味・関心を持った箇所がデータに現れた。特に、生徒が気づいていない自らの興味・関心に対する強い反応があったので、「新しい気づきの発見」としてシステムが活用できると検証できた。

●測定の様子

生徒の机の上にカメラを設置し、講話や議論等を行っている時に生体反応を測定。リアルタイムで、生徒の感情を見ることもできる。

また、このシステムを使用し、社会課題を解決するためのアイデアや新たな起業の方法を考える授業も行った。



(中日新聞記事)

○担当教員考察：

スタートアップ企業であるOlive様との出会いは、愛知県スタートアップ推進課からのご紹介から始まった。愛知県では、STATION Aiと呼ばれるインキュベーションセンターの供用開始を令和5年10月に控えている。本校でも愛知県スタートアップ推進課との連携、STATION Aiとの連携を計画している背景から本連携プロジェクトが始まった。『感情の見える化』を目指すシステムは、さまざまな場面での活用が期待される。教育現場でもそれは例外ではない。ただし、どのような活用が教育において有効かが未知数である。人の感情を数値化することに不安や疑念を覚えたり、見られたくないと感じる人もいるだろう。ただ、科学技術や文化文明の長い歴史において、人は同じような歩みをしているのではないだろうか。何が成功で、何が失敗か、何が必要で、何が不必要なのかは、さらに先に未来に初めてわかることであり、それを考えず自らの志を信じて進んでいる。そして、将来、それが失敗、不必要だとなったとしてもそれが次への進化につながる糧になる。『感情の見える化』は先端技術である。それを体感すること、それに生きている大人に触れること自体で、すでに生徒たちにとって大きな学びになっている。本校の校訓は、「Frontier Spirit」である。まさにOliveの方々はそのを体現している。物事の良し悪しを判断し、評価し、賛否をいう傾向が高まる現代社会において、まずはチャレンジする。そこからゆっくり考えてみようというスタンスを学んでほしいと思う。

(担当教員 黒宮祥男)



[B] 高校生国際会議（奈良県）

名称：令和5年度高校生国際会議

日時：令和5年8月10日(木)

主催：奈良県教育委員会、奈良県立国際高等学校、高校生運営委員会

共催：国連世界観光機関(UNWTO)駐日事務所

開催方法：ハイブリッド型（対面及びオンライン形式）

趣旨：SDGs等の地球規模の課題に対して、国内外の高校生が高校生として何ができるのかについて議論し、既存の仕組みを客観的に見つめ直し、最古の国際都市である奈良から持続可能な社会に向けて新たな価値を提唱していく

〈参加生徒のリフレクション〉

奈良県で行われた高校生国際会議では、SDGs等の地球規模の課題に対し、国内外の高校生が自分たちでできることを考え議論しました。会議は主に英語で行われましたが、本校では今回のような英語での発表の機会が多くあるため、積極的に議論を進めていくことができました。本校の発表は、SDGsに取り組んでいる部活動「SDGs未来倶楽部Sus-Teen!」の活動やそこで作り出した「おちょこ」と「キャンドル」をリサイクルした「おちょんどん」、高校2年生で行う国際理解研修にて学んだ「観光業とゴミ問題の関わり」などを紹介しました。他校の生徒の発表や議論を経て、私たちの持つ知識に加え、新しく学びを深めることができたため、とても有意義な時間を過ごすことができたと感じています。

私はグループの代表者として選出され、本会議のまとめとして提言を作成しました。各テーマの議論内容の共有と提言作成は1時間に及ぶ慎重な話し合いとなり、異なるテーマでも同じような問題が挙げられていたり目新しい意見が飛び交ったりしてとても興味深く濃い時間を過ごすことができました。高校生のみで行った提言作成会議だったのではじめはやや不安がありましたが、積極的な学生が多くたくさんの議論ができました。



私は高校生国際会議を通して、様々な知見を広げ、地球規模の課題に今までよりも目を向けるようになりました。ここでの学びを忘れずに、残りの高校生活を送りたいと思います。

矢野花怜（中高一貫普通科2年）



[C] 全国高校生フォーラム（令和5年12月17日（日）10:00～16:00）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

[1] 取り組み

全国高校生フォーラムは4年ぶりの対面開催となり、本校を含む103校の生徒がそれぞれの学校で行なっているグローバルな課題の解決の取り組みのポスターセッションと「Diversity in my life, in your lives」をテーマにグループディスカッションを行った。

[2] 対象生徒

中高一貫2年：3名（鬼頭湧紀、福田桜典、増永耕大）引率教員：1名

[3] 本校のポスターセッション

テーマ：「遊び」と「子どもたちの笑顔」の関係性

世界中には生活環境や歴史・文化の違いによって多様な「遊び」がある。その「遊び」をしている時の「子どもたちの笑顔」の中にある本質は、国や地域で違うのではないだろうかと考えた。私たちは、その本質や「遊び」と「子どもたちの笑顔」の関係性を明らかにするためにカンボジアに調査しに行った。そして、子どもたちの笑顔と遊びの中に日本とは違う様々な要素が関係していることがわかった。

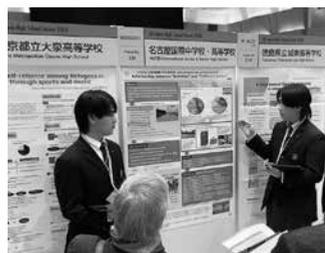
[4] プログラムの時間割

9:15	受付
10:00	開会式 オリエンテーション
10:25～11:50	生徒交流会
11:50～12:55	昼食
12:55～14:20	ポスターセッション
14:20～14:45	ポスター自由閲覧タイム 自由交流
15:00	閉会式

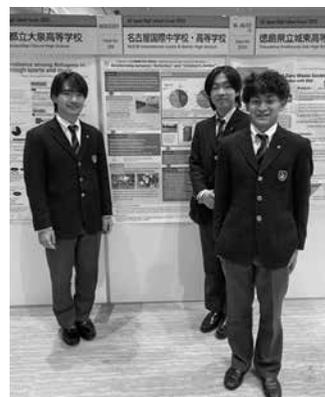
[5] 活動の様子

[6] 参加生徒の所感

私は高校生フォーラムに参加し、グループで連携して努力をすることができた。最初はどこから始めたら良いのかも分からなかったが、先生方の援助もあり、その制作の手順を理解し進むこととなり、優れたポスター及び内容を成し遂げることができた。人前で話をするのは得意ではなかったが、この経験を経て、人前で話すことの苦手意識を取り除くことができ、将来の夢である英語教師になる為に、これからの1つ1つの挑戦にも積極的に参加をしようと思った。（鬼頭湧紀）



ポスターセッションの様子



作成したポスターの前での写真



Relationship between “Activities” and “Children’s Smiles”



Reason

The reason that we started this study came from seeing the children’s reactions when we brought some playthings to the village of Kompong Phluk. We thought that there are deep relationship between “activities” and “children’s smiles”.

Searching about Cambodia online

Cambodia Overview

- Population: 15.3 million
- Ethnic Groups: 94% Khmer, 3% Chinese, 3% Others
- Adult Literacy Rate: 84%



Educational Data

- Completion rates for 2021
- Elementary education: 87.4%
- First semester secondary education: 48.1%
- Many children do not complete mandatory education

Reference (JICA HP)

Creating Hypothesis

Our Hypothesis

- Cambodian children only have few opportunities of entertainment.
- Because they are so busy making a living, they do not have time to play a lot.
- They don't have enough toys to play with.



School Trip to Cambodia via Vietnam from August 16th to 23rd

Fieldwork

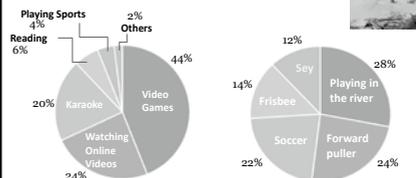
Based on the above, we conducted a field survey of children in the village of **Kompong Phluk in Cambodia.**



We brought frisbees and soccer balls from Japan to befriend the local children. We investigated the local children’s activities with Sey (shuttlecock) and jump ropes which they have.

Survey

(Q) What do you do for fun?



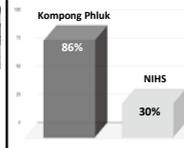
【Survey of 50 students from NIHS】
More than half of the students used electronic devices for purpose such as playing games, watching movies, and composing music.

【Survey of 50 children from Kompong Phluk】
All of children were playing outside and they have many ideas of creating new games.

(Q) Do you feel happiness in your life?



43 out of 50 children in Kompong Phluk feel happiness in their life. None of them use electronic devices in their regular life.



35 out of 50 students in our school are not satisfy with their life even though they have a lot of devices to connect with others.



Even though, children in Kompong Phluk do not have any electronic devices as an entertainment, the happiness is much higher than some of our students. The result shows that owning electronic devices do not connect directly to happiness.

Well-Being What is “Well Being?”

According to the World Health Organization, “Well being” means a state of complete physical, mental, and social well-being.”
From the survey, we learned that children in Kompong Phluk are full with smiles even though they do not live in an affluent environment. We think that creativity in their activities and have a spirit of enjoyment in everyday life create happiness.
Although we live in a wealth environment and have a wide variety of activities, our happiness low because we do not have the same spirit as Kompong Phluk children.
We believe that the people in Cambodia, who are not rich but happy, and people in Japan, who are rich but not happy, can solve each other’s issues by interacting and helping each other.

▶Thinking as a Personal Problem

I would like to make the most of this research and major in international relations when I go to the university. I am deeply interested in the SDGs “Zero Hunger” and would like to actively participate in overseas volunteer activities. If I have another opportunity, I would like to go to other countries and do what I can to help them as much as I can.

▶Special Thanks

Special thanks to teachers who took us to Cambodia, the local guides, and coordinators. Thanks to the villagers of Kompong Phluk or making this research possible.



カンボジアのコンボンブルック村の子どもたち50名と本校の生徒50名に「何をしている時が楽しいですか」「今あなたは幸せを感じますか」という2つの質問をした。その結果、コンボンブルック村の子どもは最新の電子機器がないのにも関わらず、本校生徒よりも約3倍の幸福を感じていた。この結果から、生徒たちは電子機器を持っていることは直接幸福に繋がらないことが分かった。さらに自分たちで遊びを考えた方がより幸福度を感じることも知ることができた。

[D] メタバースの広がり—東海テレビ放送株式会社と連携—

イベント名：Z世代と考える！未来のTVスクール

主催：名古屋国際中学校・高等学校、東海テレビ放送株式会社

期日：令和5年7月27日（木）

開催方法：ハイブリッド型（対面および仮想空間を使用したオンラインを併用して実施）

趣旨：「Z世代と考える!未来のTVスクール」は、SNS時代を生きる子どもたちにとってメディアリテラシーの醸成が喫緊の課題であることを踏まえ、リアル開催と同時にメタバースを併用することにより、地域差を超えて参加できるイベントとして開催した。

〈日程〉

13:00～14:00	受付（ログイン）
14:00～14:05	開会
14:05～14:35	基調講演：伏原健之氏 東海テレビ報道部統括(ZOOM配信)
14:35～14:50	アイスブレイク
14:50～15:00	休憩
15:00～15:45	VRカンファレンス
15:45～15:55	発表
15:55～16:00	講評・閉会

〈詳細〉

基調講演／テーマ：「持続可能社会とテレビ～地域の課題を知って、考えて、伝える～」

アイスブレイク：メタバース空間でYes/Noクイズ

VRカンファレンス／テーマ：「中・高校生が考える未来のテレビの役割とは？」「あなたにとって理想のテレビとは？」



〈生徒のリフレクション〉

未来のテレビに関するディスカッションの中では、今の若者世代にはテレビを観るとい
う習慣が減り、それと同時に、SNSなどを視聴する時間が増えた、という意見が多く上
りました。これは、自分にも当てはまりました。SNSはスマホからもアクセスでき、時
間や場所の制限なく見ることができます。よって、気軽にどこでも見ることができるSNS
を使う頻度が増えたと考えます。今後、テレビの情報やニュースを、若者がよく使うSNS
として使用することができれば、理想のテレビになると思いました。

八田賢治（高校2年国際教養科）



私は今回の東海テレビのイベントにて、司会を務めさせていただきました。メタバース空間を使うなど、今までにない開催方法だったので、予定通りに進まないこともありましたが、一緒に司会をしてくださったアナウンサーさんやスタッフさんのアドバイスもあり、無事に終えることができました。臨機応変に行動することなど、今後に生きる経験を積むことができたと感じました。

布施梨花（高校2年普通科国際バカロレアクラス）



[E] Business Design Club実践報告（企業連携）

(a) プレ・あいちスタートアップフェス2024

日時：令和5年11月24日

主催：あいちスタートアップフェス実行委員会

概要：「愛知県で、世界とつながり、未来体験・未来創造を。」を掲げるあいちスタートアップフェスの第4回に向け、今世界や愛知県にとって重要なテーマや視点について、業界や地域を越えて対話し、これから生み出すべき「未来体験・未来創造」の機会についての意見やアイデアを共有した。



(b) TOMODACHI Boeing Entrepreneurship Seminar
2023

日時：令和5年8月～3月（8ヶ月間）

主催：公益財団法人 米日カウンシル—ジャパン

概要：全国の高大学生が8ヶ月かけてビジネスプランを構想し、新たなイノベーションを生み出すプロジェクト。日米の次世代のリーダーの育成を目指す米日カウンシルと在日米国大使館が主導する官民パートナーシップ。



(c) 高校生アイデアコンテスト及び起業家メンタリング

日時：令和5年12月23日 主催：名古屋市立大学

概要：愛知県の高校生がビジネスプランのプレゼンを行うコンテストに出場。6時間という限られた時間の中で、該当インタビューやアンケートを行い、SDGsに貢献するサプリメントを提案。本校は優秀賞を受賞し、1月～3月にかけて起業家をメンターとして、ビジネスモデルを構想中。

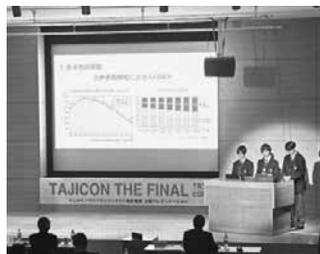


(d) 多治見ビジネスコンテスト高校生部門

日時：令和6年1月27日 主催：多治見市産業観光科

概要：街頭インタビューや現地調査を行い、多治見市の地域課題解決に向けたプレゼンを行なった。

高齢化社会が抱える課題解決に向けて、福祉施設の経営者にもヒアリングを行い、新しい故郷づくりに向けた福祉施設を提案した。



[F] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践報告（外部連携）

(a) 八事里山づくりの会との協働活動

日時：令和5年5月20日（土）、6月10日（金）

11月18日（土）、12月16日（土）

令和6年1月27日（土）、2月16日（金）

13時00分～14時00分

場所：八事興正寺公園

主催：昭和三区役所、八事里山づくりの会

内容：名古屋市昭和三区役所と昨年度から継続している八事興正寺公園内の森の保全活動である。間伐作業のみならず、地域の方がとの交流をするイベントも行った。



↑枝打ちをして、植物の生育を促したり、日があたりやすいようにする。

(b) 日進市立北小学校での学習出前授業

日時：令和5年7月13日（木）13時50分～

15時25分

場所：日進市立北小学校

主催：日進市立北小学校

内容：小学5年生4クラス、総合的な学習の時間2時限分において、活動内容に関するSDGsの理解を深めるための授業を実施した。



↑1組～4組に、それぞれ2～3名の本校生徒がアップサイクルを理解してもらうために、自ら取り組んだ活動を紹介しながら授業を行った。



←休み時間、開発したSDGs啓発玩具「Sus-ガチャ」を児童たちは体験した。

(c) SDGs将来世代創造フォーラム2023出展

日時：令和5年8月23日（水）10時00分～16時00分

場所：名古屋中小企業振興会館 吹上ホール

主催：アサヒ飲料株式会社

内容：SDGsの啓発活動及び実践活動発表

(d) SDGs AICHI EXPO出展及び活動報告

日時：令和5年10月5日（木）6日（金）7日（土）10時00分～17時00分

場所：愛知県国際展示場

主催：SDGs AICHI EXPO実行委員会

内容：SDGsの啓発活動及び実践活動発表



↑実践活動の紹介やワークショップ実施



↑プレゼンテーション(演台にて)

(e) 第4回SDGsフェスティバル 出展

日時：令和5年11月2日（木）

場所：名古屋東京海上日動ビルディング・十六銀行名古屋ビル

主催：中部圏SDGs広域プラットフォーム

内容：SDGsの啓発活動及び実践活動発表



↑実践活動の紹介



↑ある企業から取材中

(f) 片平学区ローカルSDGsプロジェクト—SDGsマルシェ&トーク—出展

日時：令和5年11月23日（土）10時00分～16時00分

場所：片平ふれあいセンター

主催：片平学区連絡協議会、「なごや環境大学」実行委員会

(G) その他の活動

○名古屋商科大学大学祭にて出展



↑ 系列校の国際高校生徒との交流



↑ 留学生も尾州糸のワークショップを体験

○地元ケーブルテレビの取材



↑ 鶴舞公園でのSDGs活動について議論中



↑ 取材の内容は、ライン番組で紹介

○障がい者スポーツイベントにて運営ボランティアの実施



↑ スポーツ体験の補助



↑ 子どもワークショップのファシリテーター

【8】WWL高校生国際会議

多様な学びとヒトの出会いの場、新しいアイデアと実践の共有の場、先進的な教育実践の情報発信の場として、WWL高校生国際会議を開催した。昨年度に引き続き、仮想空間（メタバース）を活用し、バーチャル空間でのコミュニケーション体験から新しい形式の学びについても模索し、意見交換を行なった。以下、その詳細を示す。

[1] 開催要項

WWL高校生国際会議 開催要項

1 趣旨

地域課題解決へ向けた若者のアイデアや思考の共有を目指し、事業拠点校・事業連携校などの生徒が自らの地域の社会課題解決に向けた実践を語り合う。その結果、地域差による課題のあり方や国内外の多様な考え方を知るきっかけとなる。

2 主催

学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

3 期日

令和5年12月27日（水）

4 開催方法

ハイブリッド型（対面および仮想空間を使用したオンラインを併用して実施）

対 面：名古屋国際中学校・高等学校

仮想空間：NTT XR Space WEB（DOOR）

5 日程

9：00～ 9：30	受付（ログイン）
9：30～ 9：40	開会
9：45～10：45	基調講演：グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ協議会（GNIC） アシスタントマネージャー 滝 鈴花 氏
10：45～11：00	休憩
11：00～11：30	アイスペイク
11：30～12：30	昼食休憩
12：30～13：30	インタビューセッション
13：30～13：45	休憩
13：45～14：45	VRカンファレンス

共通テーマ：生徒が決める

高校生が「New Borderless Education」に向けてできること

14：50～15：20 まとめ・提言

15：20～15：30 閉会

<詳細説明>

◎ 基調講演

講演者：グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ協議会 GNIC

アシスタントマネージャー 滝 鈴花 氏

※英語による講演を実施します。（日本語による詳細配布予定）

◎ アイスペイク～共通する「好き」を探そう～

仮想空間でアバター操作し、参加者と会話をし、お互いの「好き」を見つける。

◎ インタビューセッション

仮想空間でアバター操作し、参加者同士で探究活動をインタビューする。

テーマ：「2023年で「学校」という枠を超えた活動で学びが深かったことは？」

◎ VRカンファレンス

共通テーマ：高校生と「New Borderless Education」

・2022年度WWL高校生国際会議提言と2023年度実践活動との関係性を振り返る。

・New Borderless Educationで必要なこととは何か。

[2] 内容

(1) 基調講演

「多様性を認め合い、心の豊かさを磨こう」をテーマにグレーター・ナゴヤ・イニシアティブ協議会(GNIC)アシスタントマネージャー・滝 鈴花氏による基調講演を実施した。本校生徒と名東高校生徒、東海高校生徒が本校で聴講し、他の参加生徒は仮想空間（メタバース）上の配信で講演を視聴した。

〈主な内容〉

グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ協議会の事業内容と未来に羽ばたく高校生に伝えたいことについて発表があった。講演者自身の体験を交えながら、グローバル人材に必要なスキルとして「異文化理解」と「尊重のスキル」の2点について話があった。



(2) アイスブレイク

メタバース空間でのコミュニケーションを円滑に進めるために、基本操作の説明後、〈共通する「好き」を探そう〉をテーマにアイスブレイクを実施した。

内容：アバターを操作して他の参加者と会話をし、お互いの「好き」を見つける。



開始時は戸惑いが見られたものの、他の参加者と「好き」を語り合う中で会話も弾み、自然な形で操作方法を身につけながら参加者同士の交流を深めることができた。

(3) インタビューセッション

生徒×スタートアップ企業という形でグループを編成し、令和5年に各学校で行ってきた探究活動と新たな学びについての意見交換・質疑応答を行なった。各グループでのインタビュー制限時間は10分とし、生徒が複数の企業・団体と意見交換・質疑応答ができるよう、10分毎にグループを変更しながら進めた。



インタビューセッションの様子

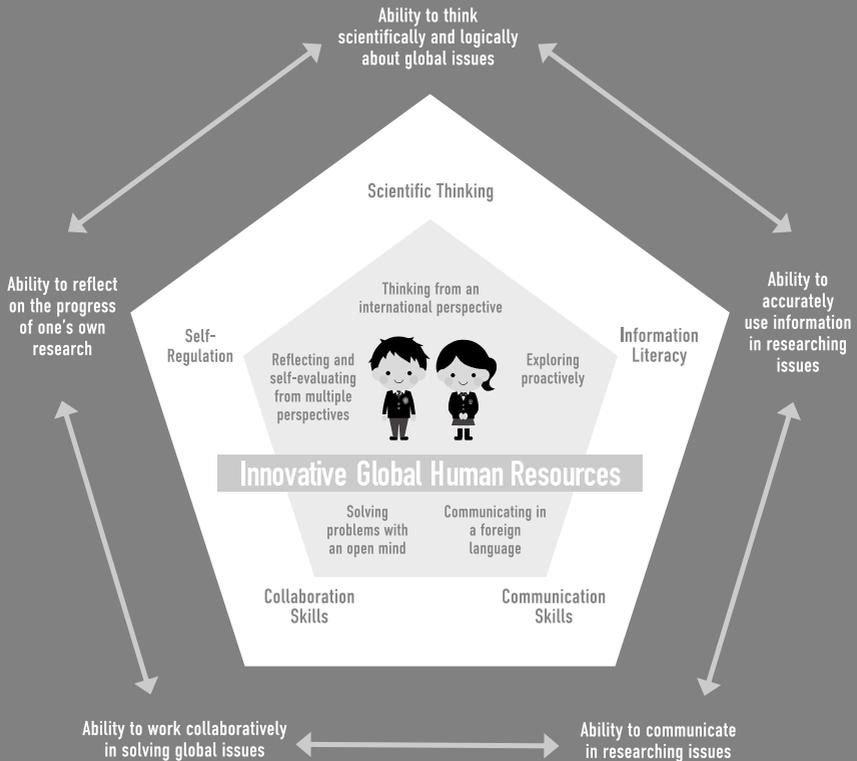
来校の参加生徒は対面にて実施、その他の参加生徒はメタバース空間において実施した。生徒からも企業・団体に向けて様々な疑問などを投げかけることで、新たな視点を手に入れるだけでなく既存の知識を深めることができた。どのグループでも、活発な意見交換が行なわれ、有意義な時間となった。

(4) VRカンファレンス

令和4年度WWL高校生国際会議提言と令和5年度実践活動との関係性を振り返り、「New Borderless Education」の実現に向けてできることについて議論した(今回は、本校の5つのグラデュエーションポリシーを例に話し合いを進めた)。

Innovative Global Human Resources Living in Society 5.0

Graduation Policy



NUCB International Junior & Senior High School

Group 1

「国際的な視野に立って思考する」(グローバルな課題を科学的・論理的に思考できる)

Group 2

「物事を主体的に探究する」(課題を探究するために情報を的確に活用できる)

Group 3

「外国語でコミュニケーションする」(課題を探究するためにコミュニケーションできる)

Group 4

「寛容な態度をもって問題を解決する」(グローバルな課題を協働して解決しようとする)

Group 5

「自らを省察して多面的に評価する」(課題探究の進行の管理や振り返りができる)



VRカンファレンスの様子

生徒中心に議論を進め、企業の方にはアドバイザーとして各グループの議論の様子を見てもらい、適宜助言をいただいた。

【New Borderless Educationの実現に向けた具体的な行動・活動】

高校生国際会議 2023	
Group1 国際的な視野に立って思考する	国際問題に関するイベントなどを作る。オンラインと対面で開催することで、多様なコミュニティが生まれ、文化などの交流に役立つ
Group2 物事を主体的に探求する	フロンティアスピリットを大切に、一人一人が持って行動する。
Group3 外国語でコミュニケーションをする	ジェスチャーを使ったり、簡単な言葉で相手に伝えるなどの方法でコミュニケーションをとっていく。相手の背景や文化のことを尊重する。
Group4 寛容な態度を持って問題を解決する	今の教育システムを攻めるのではなく、一回受け入れることによって変えていく。たくさんのアイデアを知ることによって自分たちの知識の向上をしていく。
Group5 自らを省察して多面的に評価する	(メタバースの通信問題について)メタバースのメリットとして、お互いのつながりを簡単に深めていくことができる。デメリットは、通信環境とメタバースについての知識問題が挙げられる。その改善のために、場を仕切るホストを作ったり、ツールに慣れるようにする。

[3] アンケート結果

【参加者の回答】

ご自身の学校理念に「New Borderless」をプラスするとどのようなことができるか

- ・新しいプログラムを授業全体で取り入れたり、既存の教育課程をアップグレードさせるような提案、または実現がよりいっそう可能になると思う。
- ・型にはまらない学習ができる。
- ・国境を越えて繋がるできるようになり、価値観が違う国同士でも互いに理解し合っていくことができると思う。
- ・教養、立志、そして世界へというスローガンとプラスすることで、よりグローバルに(国境の垣根なく)学ぶことができる。
- ・海外の学校生徒とリアルタイムで意見交換できる。
- ・遠隔での教育が不自由なく受けることができ、授業を受ける場所の選択が広がる。

他のオンラインコミュニケーションツール（ZoomやGoogle Meetsなど）と比較して、メタバースでの会議運営で気がついたこと

- ・仮想空間内で1対1の会話ができることは魅力的であったが、通信状況が悪く相手の声が聞こえづらかったりした。
- ・Zoomなどはその場に関係がある人しかいないが、メタバースには色んな人が同じ空間内にいて、同時多発的に様々な声や会話内容が聞こえてきて面白かった。
- ・必要以上に周囲の会話聞こえてきた。
- ・色んなアバターを用いてゲーム感覚で交流でき、堅苦しい雰囲気にならず参加しやすかった。

メタバースの特性の1つとして、「プライバシー性の高さ」（顔を出さない）が挙げられるが、その特性について今回の会議参加を通して感じたこと

- ・参加へのハードルが低い。
- ・気軽に参加、会話ができるが、顔が見えないために相手の表情が読み取りにくい。
- ・外見にとらわれず、第一印象をうまく誤摩化したまま交流が続けられるのが良い。
- ・集団での会話において、誰が発言しているのかがわかりにくい。
- ・プライバシーが守られている点が良い。

その他、意見・感想

- ・企業の方から、コミュニケーションをとる相手のバックグラウンドを知ることの重要性について教わった。言語が通じない場合にとるジェスチャーにおいても、文化的背景により失礼にあたる身振り手振りがあることについて具体的な例を聞くことができた。基調講演のお話にもあったが、国・性別・世代に関わらずどの人に対してもリスペクトの気持ちを持つことが大事だということを学んだ。
- ・多様性を認め合い、お互いを尊重することが国際社会で求められていると感じた。まずは自分の周りの人とのコミュニケーションを大事にしていきたい。
- ・企業の方との意見交換の中で、新しい学びを得るには恐れず一歩踏み出しているいろんな世界に飛び込んでみる好奇心が大切だと学んだ。
- ・今回の会議は、国内外を問わず多方面で活躍する大人の方々や他校生徒と、教育のあり方や課題について議論することができた。会議の中で普段なかなか聞くことのできない意見を聞くことができ、私にとって大きな刺激となった。
- ・グローバルに活躍される企業の方の話聞き、視野の広さを保つための思考や社会にとってのwell-beingとは何かを学ぶことができた。また、他校生徒とのグループワークを通じて、今後の学校生活において学外の年代との交流も大切にしていきたいと改めて実感した。
- ・グループワークの中で、「学校の生徒と先生を他校と入れ替えてみてはどうか」という意見が出た。この取り組みを国内だけでなく海外の学校とも生徒と先生を交換してオンラインで授業を体験することができるようになると、国際的な視野を身に付けやすいのではないかと思った。特にメタバースは体験・体感という点において優れていると感じるのでよりリアル感のある授業をBorderlessで展開できるのではないかと考える。
- ・「人間には無限大の可能性がある」これが、私が今回の高校生国際会議で得た学びである。会議の中で新しい意見や考え方を発見でき、沢山の人の意見が合わさることで唯一無二のものを創り出せる可能性を感じた。改善点もあったが、これは悪いことではなく、これからも挑戦できる、より良いものにできる可能性があるということだと思う。

[4] 会議運営生徒の感想

- ・生徒中心で企画内容、議論のテーマを考えることは難しかったが、学校での学びについてより主体的に考える良い機会となった。会議当日には議論を進行しながら、何事も枠にとらわれすぎないことが大切だということを痛感した。
- ・参加校や企業への連絡係を主に担当した。最初は敬語の使い方など、失礼のないようにということに気をとられすぎて、文章作成において非常に苦勞した。しかし、大切なことは伝達したい内容を的確に伝えること、相手が知りたい情報は何かということをも的確に把握することが大切であることを会議当日までの連絡のやり取りの中で学ぶことができた。社会人にならないと経験できないような緊張感があり、とても良い経験ができたと思う。
- ・メタバース空間の通信環境が悪いときの進行に苦勞したが、参加生徒や参加企業の方々の協力やアドバイス、臨機応変な対応もあり何とか無事に終えることができた。その皆さんの姿勢から、うまく進まないからできない・やらないという選択ではなく、できることは何か・何がやれるかを探る力の大切さを痛感した。
- ・これまで、高校生国際会議やいろんなイベントに参加することはあっても、運営をすることは初めてで最初は戸惑いもあった。生徒中心の運営は大変だが、生徒が本当に話し合いたいことや疑問に感じることを議論するには良い形ではないかと思った。





提言

「私たちは、とらわれることがない教育を提唱し、学びを続けていきます。」

～ New Borderless Education ～

(1) ハード面

ICT 技術を駆使することで、場所や時間、機会、様々な格差に関係なく、いつでも、どこでも、どんな状況でも、どんな境遇でも、学ぶことができます。

(2) ソフト面

学びの内容も、教科書や学校ということにとらわれ過ぎず、様々な人から様々なことを学ぶことで、生徒の可能性が広がります。好きなことを突き詰めることでその分野の専門家になることもできます。国や学校がこういう学びをしてほしい、こういう生徒になってほしいと決めるのではなく、生徒一人一人がこういう学びをしたい、こういう人になりたいと願い、それが実現できる教育です。

December 27, 2022

名古屋商科大学系列校
名古屋国際 中学校
高等学校
NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

【9】ConnectEd 2024

指定2年目となる事業成果報告会では、テーマを「連携深化 社会との連携による学びの拡充でSociety 5.0を生き抜く」とした。本校では、グレーター・ナゴヤをフィールドとして、スタートアップ企業や大学等との連携を積極的に模索してきた。今年度の成果報告会ではこの点に焦点を当てた活動報告を実施した。また、中部経済連合会 国際部部長野村一樹氏による『名古屋から広げる国際経済交流』と題した基調講演を実施した。当日は会場・オンライン合わせて103名が参加した。

[1] 開催要項/配布ポスター

ConnectEd 2024 開催要項

1. 趣 旨
文部科学省は、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するため、全国に拠点校を配置し、高校生へ高度な学びを提供する取り組みを進めている。これは、Society5.0に向けたリーディング・プロジェクトの一環であり、WWL コンソーシアム構築を目指している。

名古屋国際中学校・高等学校は、WWL カリキュラム開発拠点校（2022年採択）として、国際教育を推進する機関とつながり、「Society5.0における未来の中等教育機関のあり方」を探究し、その実現に向けて研究開発・実践を進めている。

本イベントの目的は、令和5年度の名古屋国際中学校・高等学校 WWL 活動成果の報告と、本事業の成果普及を目的として開催する。

2. 主 催
学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

3. 期 日
令和6年2月3日（土）10:30 開会 15:00 閉会

4. 形 式
対面（名古屋国際中学校・高等学校）
オンライン（Zoom） ミーティングID：820 1831 3301 パスワード：NIHSConEd4

5. 後 援
名古屋市教育委員会

6. テーマ
連携深化 社会との連携による学びの拡充で Society 5.0 を生き抜く

7. 当日の流れ
10:00-10:30 受付（Zoom 接続開始）
10:30-10:40 開会・校長挨拶 [校長 小林 格]
10:40-10:55 WWL 事業説明 [国際教育推進部主任 黒宮 祥男]
10:55-12:00 基調講演
『名古屋から広げる国際経済交流』
一般社団法人 中部経済連合会 国際部部長 野村 一樹 氏

12:00-13:00 昼食
13:00-14:50 活動報告
① 海外研修を通じた探究学習 <カンボジア・ベトナム研修の事例から>
② 先端技術を用いた新たな会議参加の方法 <2023年度高校生国際会議の事例から>
③ 企業と連携した授業展開 <スタートアップ企業等との連携事例から>
④ 企業・NPO・自治体とのパートナーシップ <学外と連携した部活動の事例から>
⑤ 社会とつながる新しい教育課程の提案 <国際バカロレアの観点から>
⑥ 高大接続によるシームレスな学び <名古屋商科大学（NUCB）との連携事例から>

14:50-15:00 講評
名古屋国際中学校・高等学校カリキュラムアドバイザー 木本 健太郎 氏

15:00 閉会



ConnectEd 2024

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム
構築支援事業成果報告会

文部科学省は、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するため、全国に拠点校を配置し、高校生へ高度な学びを提供する取り組みを進めています。これは、Society5.0に向けたリーディング・プロジェクトの一端であり、WWLコンソーシアム構築を目指しています。

名古屋国際中学校・高等学校は、WWLカリキュラム開発拠点校(2022年採択)として、国際教育を推進する機関とながり、「Society5.0における未来の中等教育機関のあり方」を探究し、その実現に向けて研究開発・実践を進めています。

※ConnectEdは、国際教育推進校によるイノベティブなグローバル人材を育成するプロジェクトです。



テーマ 連携深化 社会との連携による学びの拡充で Society5.0を生き抜く

2024. **2.3** SAT

時間 10:30～15:00 **定員** 100名
(10:00 開場・接続開始) (申込先着)

形式 対面・オンライン開催 (Zoom)

[後援] 名古屋市教育委員会

右記QRコードから
お申込みください



本報告会は文部科学省WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業の助成を受けたものです。



SCHEDULE

10:30	開会
10:40	名古屋国際中学校・高等学校におけるWWLコンソーシアム構築支援事業の概要説明
10:55	基調講演 名古屋から広げる国際経済交流 一般社団法人 中部経済連合会 国際部部長 野村 一樹 氏
12:00	昼食
13:00	活動報告 1. 海外研修を通じた探究学習 ＜カンボジア・ベトナム研修の事例から＞ 2. 先端技術を用いた新たな会議参加の方法 ＜2023年度高校生国際会議の事例から＞ 3. 企業と連携した授業展開 ＜スタートアップ企業等との連携事例から＞ 4. 企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ ＜学外と連携した部活動の事例から＞ 5. 社会とつながる新しい教育課程の提案 ＜国際バカロレア教育の観点から＞ 6. 高大接続によるシームレスな学び ＜名古屋商科大学(NUCB)との連携事例から＞
14:50	講評
15:00	閉会

名古屋商科大学
名古屋国際 中学校 高等学校

お問い合わせはこちらから

名古屋国際中学校・高等学校
(WWLカリキュラム開発拠点校)



[2] 詳細

(1) 事業説明



[発表者]

黒宮祥男教諭（国際教育推進部主任）

[内容]

ConnectEd 2 0 2 4 開催に至る経緯やWWL事業に関する本校が目指すべき方向性について説明した。特に、学校-個人-社会の関わりにおける学びの在り方や学べる内容について、先端技術（仮想空間）を活用した展望を述べた。

(2) 基調講演

基調講演として、一般社団法人中部経済連合会より、国際部部長の野村一樹氏をお招きした。一般社団法人中部経済連合会（中経連）は、長野・岐阜・静岡・愛知・三重の中部5県を活動エリアとする広域的な総合経済団体である。1951年4月に設立、中部圏を代表する約760の企業・学校法人・経済団体などで構成されており、内外の社会・経済などに関する諸問題について調査研究を行い、中部経済界としての意見を取りまとめ、実現に向けて、政府・関係機関等に対する積極的な提言・要望や様々な活動に取り組む組織である。

本校では、VUCA*時代においても、名古屋（愛知）を活性化させるために世界に飛び立つ高校生が学び続けられる教育圏の創出を目指しており、今回は野村氏に『名古屋から広げる国際経済交流』と題してご講演いただいた。

VUCA：Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）



[講演者]

野村一樹 氏

一般社団法人中部経済連合会 国際部部長

[テーマ]

名古屋から広げる国際経済交流

[内容]

中部圏の現状と将来像について、魅力的な人材とは何かを軸に述べた。多様性を追求した企業改革を進める中でも環境整備の過渡期であり、中部圏で魅力ある人材が増えることが、魅力的な中部圏を創出することに繋がる。製造業で発展してきた中部圏は人口減少や人材の国際競争で様々な課題に直面しているが、GXやスタートアップなど、高い付加価値が生み出す産業が成長し続ける圏域を作ること、多様で才能豊かな人材が活躍し、国内外から人を惹きつける圏域を作ること、連携のさらなる活発化で持続的に発展する圏域を作ることが中部経済圏を今後発展し得る手段である。



(3) 活動報告

活動報告は、2つのエリアに分け、6つのテーマに関する発表を行った。発表は、①生徒のみ ②教員のみ（+生徒）③生徒と外部関係者の3つの形式を取り、多様な立場での報告や質疑応答ができるようにした。発表の様子は、オンライン配信をし、全国の方々に視聴及びチャット機能を用いた質疑応答できる体制を整えた。

【①海外研修を通じた探究学習 〈カンボジア・ベトナム研修の事例から〉】



[発表者]

鬼頭湧紀（普通科中高一貫5年）

福田桜典（普通科中高一貫5年）

増永耕大（普通科中高一貫5年）

[内容]

カンボジアの子どもたちにおける「遊び」と「子どもたちの笑顔」の関係性について、日本-カンボジアにおける遊びの種類の比較や幸福感の差異を踏まえ発表した。

【②先端技術を用いた新たな会議参加の方法 〈2023年度高校生国際会議の事例から〉】



[発表者]

布施梨花（普通科国際バカロレアクラス2年）

奥村仁崇教諭（数学科）

[内容]

メタバース（NTT DOORとの協働）やオンライン投票システムSurfvote（Polimill株式会社との協働）を活用し本校が主催した高校生国際会議の運営方法とその会議内容について発表した。

【③企業と連携した授業展開 〈スタートアップ企業等との連携事例から〉】



[発表者]

丹羽啓透（普通科中高一貫5年）

矢野暉幸（普通科中高一貫5年）

河合航輝教諭（理科）

黒宮祥男教諭（社会科）

[内容]

学校設定科目「WWL特論Ⅰ」におけるアサヒ飲料株式会社との新商品企画の授業展開（普通科グローバル探究クラス）と、Olive株式会社のセンシング技術を用いた感情の見える化を導入した授業展開（普通科中高一貫クラス）とについて発表した。

【④企業・NPO・自治体とのパートナーシップ 〈学外と連携した部活動の事例から〉】



〔発表者〕

服部優奈（普通科中高一貫4年）
坂田俊空（普通科国際バカロレアクラス1年）
松雪七之（普通科中高一貫2年）
神山清光教諭（情報科）

〔内容〕

学外連携を積極的に行う部活動、Business Design ClubとSDGs未来倶楽部 Sus-Teen!の実践報告を行った。

【⑤社会とつながる新しい教育課程の提案 〈国際バカロレアの観点から〉】



〔発表者〕

黒宮祥男教諭（社会科）

〔内容〕

生徒に身に付けさせたいスキルと連動したカリキュラムマップ、社会とつながる学習内容を踏まえた教科シラバスの紹介と、国際バカロレアの概念を踏まえ、生徒が「社会とつながっている実感」を持てる学習内容の提案を行った。

【⑥高大接続によるシームレスな学び 〈名古屋商科大学（NUCB）との連携事例から〉】



〔発表者〕

安藤 唯（国際教養科3年）

大西直子教諭（数学科）

〔内容〕

高大一貫クラスのカリキュラムと単位接続、名古屋商科大学〔系列校〕における単位先取りのシステムについて説明し、参加者中心型学修を通じて得た学びと高校3年次の学校生活について紹介した。

(4) 講評

情報技術の活用によって、学びのフィールドは制限がなくなった。従来の学びでは、学校の中だけで完結してきた閉鎖的な側面もあったが、今年のテーマの「連携深化」がその殻を破り、新しい教育の在り方を体現している。教育界にはまだまだ制度上多くの制約があるが、名古屋国際中学校・高等学校が先駆けとなり、より柔軟で最先端の教育を展開することに今後も期待したい。

(カリキュラムアドバイザー 木本健太郎氏)

(5) 参加者アンケート (抜粋)

【基調講演】

今回の講演を拝聴し、愛知を盛り上げるための努力をされている事を知りました。子ども達に海外で活躍する事を望んでいる親はたくさん周りにもいらっしゃいますが、戻ってきて愛知を盛り上げるという意識はあまりないなと気づかされました。愛知愛を子供に伝える事を、周りの親にも伝えていきたいと思いました。

【活動報告】 *先頭の番号は発表番号

- ① プレゼン内容、発表も素晴らしく、質疑応答時の受け答え、特に物質的豊かさと精神的豊かさの「バランス」に生徒さん達が自ら気づき、理想的空論ではなく現実的に目を向けている点に感銘を受けました。
- ② メタバース空間での取り組みは世界中で広がっていて、これから更に色々な可能性が広がる世界だと聞いています。Free, Flat, Funがこれからの世界基準になるかもしれない次世代。これからの時代を担う生徒さん達が新しい世界空間で会議にチャレンジされたことを楽しく拝聴いたしました。
- ③ 企業なみの内容で、学ばせること、ハッとさせられることも多々ありました。これからも積極的に企業と取り組んで社会の問題に目を向けて欲しいです。
- ④ 自治体、企業、との連携、我々が気付かないような観点から、新しいものを発見したり、作り出し、そして、支援をするという活動をみて、頼もしく感じました。
- ⑤ 日本教育の強みとIB教育の強みを融合させたカリキュラムへの取り組みへ心から感謝いたします。教科、生徒指導だけでも十分お忙しい業務だと思います。お忙しい中でも、名古屋国際ならではのフロンティア精神を先生方自ら取り組む姿勢を見せることで生徒達の素晴らしいお手本となっていると感じます。
- ⑥ 時間的にも学びにおいても言葉の通りシームレスに有効的に学びの連続性が維持できる素晴らしい環境と取り組みだと思いました。

(6) 運営教員所感

「連携」と聞くと「学外との連携」に着眼点が置かれがちだが、ConnectEd 2024の運営をするうえでもう一つ重視したことは「学内での連携」である。同じ学校に勤務していても特別な機会が無ければ、他の教員の授業の実態や部活動、海外研修の成果を聞くことはあまりない。多くの教員に関わってもらい、本校がどこに向かおうとしているのか理解し教職員全体でベクトルをあわせていきたいと考えていた。Zoomや会場で参加した教員に対し、今後の教育活動の示唆を与えることができたのではないかと考える。次年度はさらに多くの教職員を巻き込み、本校の教育の質の向上に努めたい。

(近藤佑思 教諭 社会科)

今年度は運営という立場でConnectEd 2024に携わり、本校が多くの企業・学校とネットワークを有していることを改めて感じさせられた。私自身WWL特論Ⅰの授業を担当し、アサヒ飲料株式会社および株式会社矢場とんと連携した授業を行い、次年度に向け改善点を含め多くの収穫を得ることができた。現状本校は広大なネットワークが構築されているものの、上手に活用できていない側面があると感じる。次年度はWWL特論の企業連携学習を事業連携校と同時に行い、Zoom等のオンラインツールを利用し発表することによって、生徒たちの考えに良い効果をもたらすことに期待したい。WWL指定校として、他の教育機関へ教育パッケージを提供することで、国内の教育の質の向上に繋がる役割を担うことができれば良いと考える。

(河合航輝 教諭 理科)

【10】リングスキルを用いたWWL対象生徒の英語力効果測定

本校のネイティブインストラクターが授業者を務める学校設定科目『English Skills II』の履修者高校2年生の中から、国際理解研修やWWL特論Iを履修している生徒を中心に25名を選抜し、ケンブリッジ大学英語検定機構が開発した、国際基準CEFRレベルを迅速に判定できるオンライン型の英語4技能テスト「リングスキル」を用いて英語コミュニケーション能力の測定と検証を行った。

生徒の選抜には層化抽出法を用い、WWL事業参加度、所属学科・クラス、実用英語技能検定の取得級、英語コミュニケーションII及びEnglish Skillsの評定、大学入学共通テストで平均点を見込める英語力などのバランスを考慮した。

(1) アセスメント手法

ケンブリッジ英語検定4技能CBTリングスキル

実施日：令和5年12月26日（火）に本校にて実施

受検者：高校2年生25名対象 当日3名欠席 結果データ22名

(2) 効果測定にあたりリングスキルを選んだ理由

[1] CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）策定の元ともなったケンブリッジ英語検定の測定精度を有すること。

[2] いつでも実施可能なCBT実施体制が整っていること。

(3) 英語力検証のための比較水準の設定

大学入学共通テストの平均点を水準と仮定。分析機関であるTEFL PLANNINGによる実証研究を踏まえ、リングスキルスコア130＝大学入学共通テスト平均点として検証・分析を実施した。

(4) 測定・検証結果

[1] 平均スコアと4技能別平均スコア

図1：Average平均スコア n=22



図2：4技能 + Average平均スコア

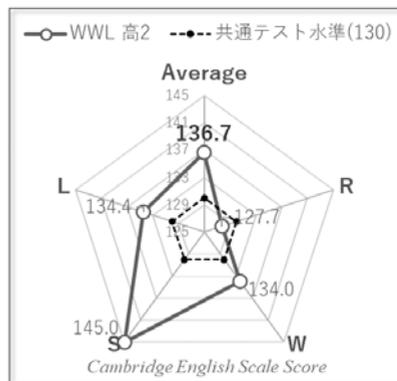
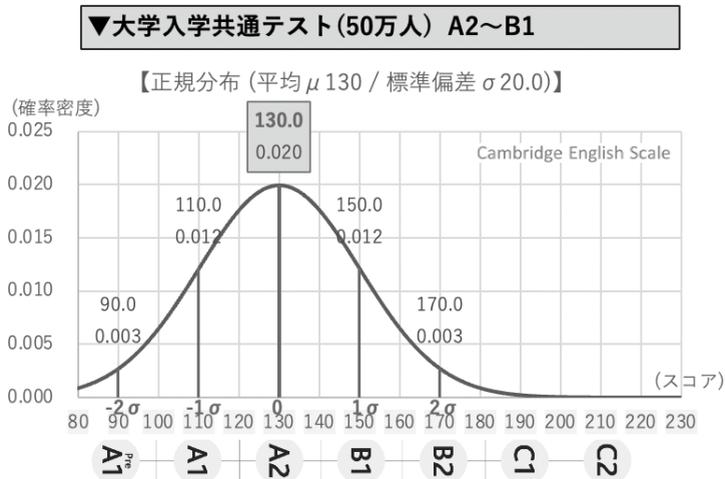


図3：Cambridge English Scaleによるリンガスキルと大学入学共通テスト相関



[2] Averageスコア分布図と条件付き予測分布図

図4：Averageスコア分布図

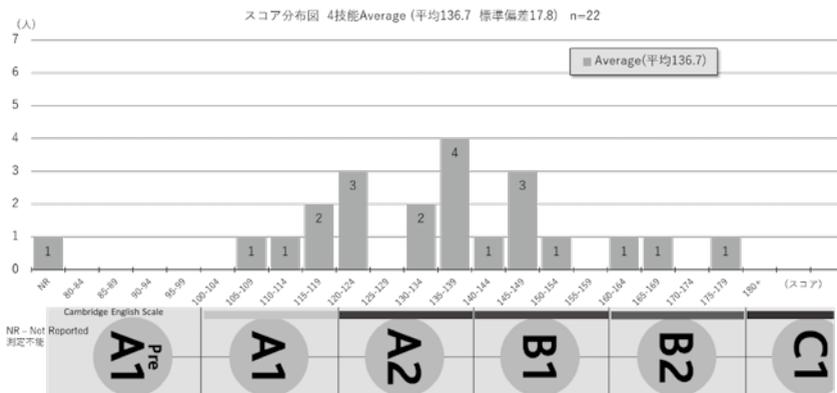


図5：条件付きスコア分布図（4技能）

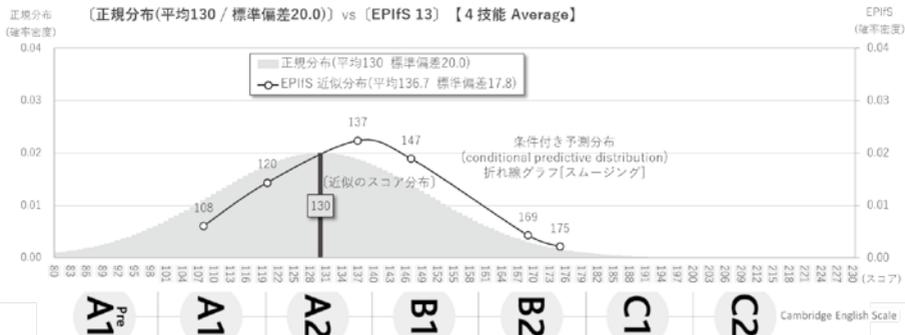


図6：条件付きスコア予測分布図 (Listening)

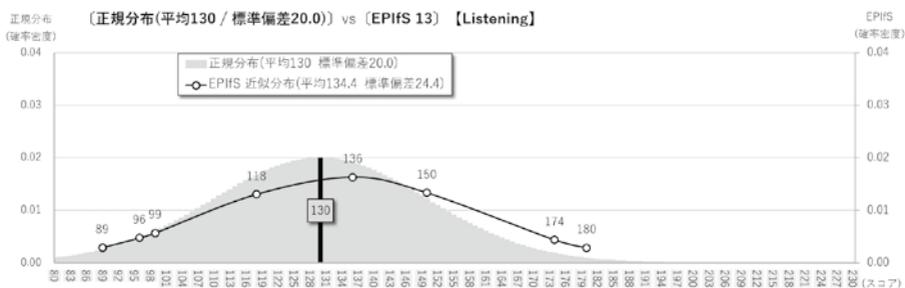


図7：条件付きスコア予測分布図 (Reading)

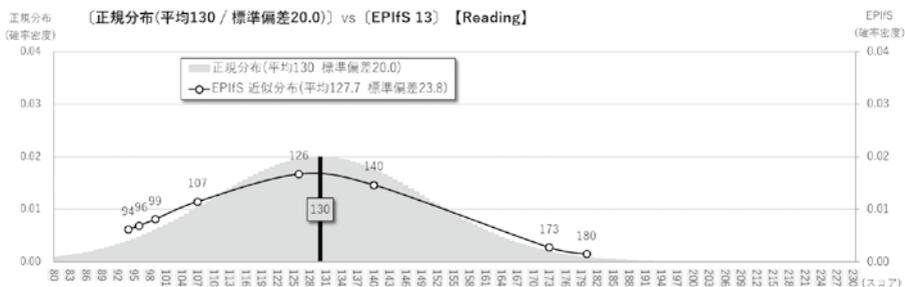


図8：条件付きスコア予測分布図 (Speaking)

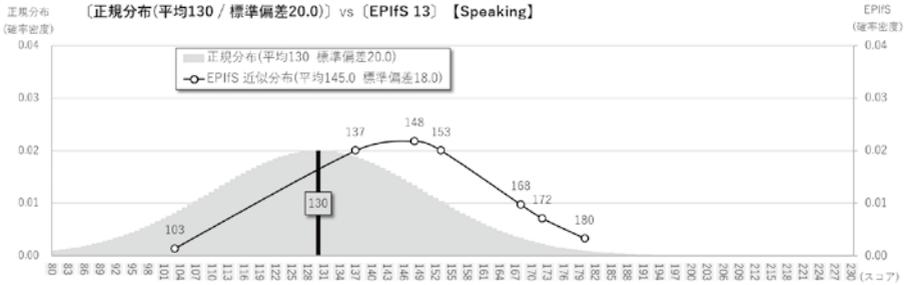
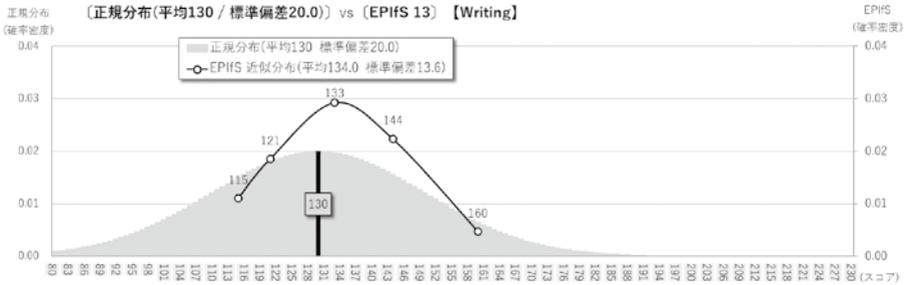


図9：条件付きスコア予測分布図 (Writing)



[3] 4 技能間の相関と散布図

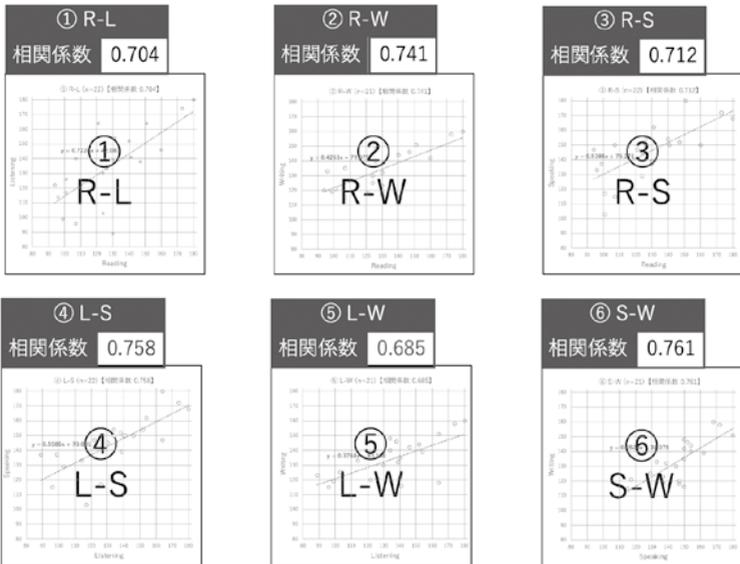
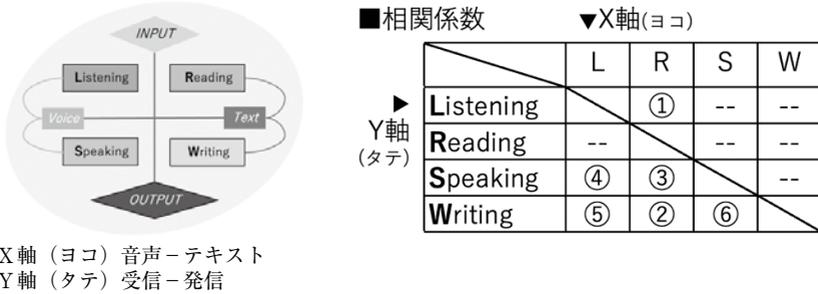


図10：4象限マトリクス



今回実施した高校2年生22名の結果では、平均レベルはCEFR A2+であった。リングスキルでは、受験者データの蓄積から、リングスキルスコア130点が大学入学共通テスト平均点レベルと相関している(図3)。スコア130点を軸として捉えた時に、本校生徒の特徴は4技能別のスコア獲得状況(図2)に現れており、Readingは平均より下回る一方で、特にSpeakingは高いスコアを示していることがわかる。

次に、22名の小データから本校の高校2年生全体のスコア分布を予測した条件付きスコア分布図(図4～図9)では、対大学入学共通テスト正規分布比で、Speakingは同様の分布形で平均値が+15ポイント、Writingは、平均値は+4ポイント止まりであるが、標準偏差13.6と生徒間でのWritingスキルの差が小さいことが分かった。これには、学校設定科目として開講している『English Skills』(高校1年次にEnglish Skills I、高校2年次にEnglish Skills II)の授業がポジティブに働いていると推測することができる。当該科目はネイティブインストラクターによる授業で、英語での自己表現(ディスカッション、プレゼンテーション)やエッセイ・ライティングに注力した授業展開を行っている。一方、スコア平均130点を下回ったReadingは、主に英語科日本人教員が担当する『英語コミュニケーション』の授業で扱う技能である。Readingは語彙力や英文法の知識など、地道に時間をかけて積み重ねていく学習姿勢が欠かせない技能であり、生徒はコミュニケーションな活動をより好む傾向がある。今回の効果測定ではその実情を反映した結果となったため、英語科で改善を図る必要がある。

最後に、22名の受験者データから、4技能間の相関を分析した。結果として、あまり4技能間での相関に差は見られなかったが、相関散布図⑤のListening—Writingの相関のみ、やや相関係数が低い結果となった。学習活動の中心がインプット(受信)かアウトプット(発信)かを縦軸、英語を音声言語として扱うか、文字言語として扱うかを横軸で作成した4象限マトリクス(図10)で最も遠い組み合わせの一つであることが言えるかもしれない。また、Readingと他技能との相関(相関散布図①②③)では、わずかではあるがWritingとの相関が高く、文字言語における親和性が見て取れる。これらの4技能間の相関を意識して、本校のウィークポイントであるReadingスキルの向上のための方策を導くことは有益であろう。今年度は22名の小グループでの実施ではあったが、引き続き生徒の英語コミュニケーション能力についての測定と分析を進め、その結果を教育課程にスピーディに反映させていきたい。

【11】運営指導委員会（ALネットワーク運営委員会・検証委員会）

第3回ALネットワーク運営委員会議事録

日時：令和5年7月7日（金）14時～15時

方法：オンライン・対面同時会議

場所：オンライン（オンラインシステム：Zoom）

対面 名古屋国際中学校・高等学校 3階 理事室

出席者：〈管理機関〉

亀倉正彦 教授（名古屋商科大学商学部）

〈運営委員〉

北村友人 教授（東京大学大学院教育学研究科）

伊藤 博 教授（名古屋商科大学大学院マネジメント研究科）

木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、鈴木 悟（教頭）

杉尾志帆（教頭）、片山寿弘（参与）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）

内藤圭祐（入試広報部長）、奥村仁崇（国際教育推進部）

大西直子（国際教育推進部）、Timothy Desmond（国際教育推進部）

伊藤 恵（国際教育推進部）、神山清光（国際教育推進部）

渡邊えみ（DP Coordinator）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、14時に開会する旨を宣言した。

管理機関である亀倉正彦教授の挨拶及び小林校長の挨拶に続いて議事に入った。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 報告事項

（1）黒宮国際教育推進部主任より、6月30日に参加した連絡協議会における本校の令和4年度活動報告の発表について、次のような報告があった。

- ・カリキュラムマップやシラバスの作成やメタバースでの高校生国際会議への関心が高く、特にメタバースは他校ではない取り組みだったようであった。
- ・外部連携について特に反応はなく、どこでもやっている取り組みと考えられる。一方スタートアップについても反応は薄かったが、これはスタートアップ自体があまり馴染みのない地域が多い可能性が考えられる。
- ・高校生国際会議で出した提言についても高い評価が得られており、その内容の活かし方が今後課題となっていく。
- ・全体として高い評価を得られたと感じており、「イノベーターを育てる環境ができつつ

ある」との評価もいただいた。

(2) 黒宮主任の報告に対し質疑応答があり、次のような発言があった。

木本健太郎様：

- ・カリキュラムマップとシラバスの「見える化」の取り組みが評価されて満足している。今年度はさらに進めて「評価」の方法まで取り組みたい。
- ・外部連携については、他校との協働を進められるとよい。
- ・メタバースについては、実際参加してみて課題も見えたので、改善していけばよい。

北村友人教授：

- ・カリキュラムマップからシラバスへ落とし込むのはなかなかできないことなので、そこが評価につながったと考える。
- ・「生徒がどう変わったか」の観点が必要である。また「プロセスをどう評価するか」が難しいのだが、これらの点の見通しはどうなっているか。

黒宮教諭：「評価」の仕方を検討することが今年の課題である。ルーブリックの作成が大変で取り組めていない。

北村教授：大変な部分を「生徒自身に評価をさせる」のはいかがか。

黒宮教諭：大枠については先生が汎用性のある評価方法を考え、細部については、様々な評価方法を生徒に示した上で、生徒自身に考えさせることを検討したい。

木本様：生徒主体で評価させることは大変興味深い。

(3) 黒宮教諭より令和5年度のWWL事業実施計画について、以下の項目の説明があり、その後質疑応答に入った。

- ① 高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクトの具体化
 - ・約100km圏内の高校との連携強化
 - ・グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ協議会（GNI）との連携
 - ・STATION Aiとの連携＝高校生の学び拠点づくり
- ② Meta-Schoolの充実
 - ・メタバースに加え、さまざまな先進技術をそれに適した教育環境へ
- ③ ALネットワーク内での情報共有
 - ・教育コンテンツを他校と共有できる環境づくり
- ④ カリキュラムマップ・シラバスの検証
 - ・カリキュラム委員会にて随時検証及び次年度に向けた改善
- ⑤ 高大接続のシステムづくり
 - ・単位認定

北村教授：

- ・これらの説明の中に「国際」のワードが出てきていないが、そこはどうなっているのか。
- ・学びと技術を整理するだけでなく、技術を活用するにあたって「なぜ使うのか」といった方向性を持つとよいと思う。

黒宮教諭：今年度も引き続き海外研修を行う。

小林校長：名古屋の姉妹都市であるフランスのランスにある連携校との交流を実現し、海外校との単位認定も目指したい。

木本様：「高校生として」の高大連携・高大接続とは、どのようなものがふさわしいか。

北村教授：自然科学系と人文社会系とで違ってくると思うが、特に人文社会系では「高校生だから何ができるのか」を考える必要がある。

伊藤博教授：高大接続が、単位取得を目的とした一方向に偏っている。双方向でこそ連携と言えるし、高大連携の言葉のほうが汎用性があるのではないか。

内藤入試広報部長：高校生としての研究の基礎体力とは何か。

北村教授：

- ・英語を例にすると、言語を学び理解を深め、「言語を運用する力を身につける」ことが、知的な基礎体力をつける、ということである。その力を活用して、社会を理解したり議論を深めたりできるようになる。
- ・各先生が持っている教科の専門性を活かし、理解を深めるための探究や教科横断の学びができるとよい。

2 講評

亀倉教授より次のような講評がなされた。

- ・今年度の活動のキーワードに「挑戦」と「基礎固め」と表されるのではないか。
- ・新しいカリキュラムマップやシラバスが評価されたことは、新しい方向性が出てきていると言える。
- ・これまでの取り組んできた事柄について、しっかりと足元を固めつつ新しい挑戦を進めていけると感じている。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、15時に閉会を宣言した。

第4回ALネットワーク運営委員会／第2回検証委員会議事録

日時：令和6年2月9日（金）12時～13時

方法：オンライン・対面同時会議

場所：オンライン（オンラインシステム：Zoom）

対面 名古屋国際中学校・高等学校 3階 理事室

出席者：

〈管理機関〉

亀倉正彦 教授（名古屋商科大学商学部）

〈運営委員〉

北村友人 教授（東京大学大学院教育学研究科）、

伊藤 博 教授（名古屋商科大学大学院マネジメント研究科）

木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈検証委員〉

鵜飼宏成 教授（名古屋市立大学学長補佐・大学院経済学研究科）

光永悠彦 准教授（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教育学部）

小野裕二 教授（名古屋商科大学商学部長）

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、鈴木 悟（教頭）

杉尾志帆（教頭）、片山寿弘（参与）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）

奥村仁崇（国際教育推進部）、大西直子（国際教育推進部）

Timothy Desmond（国際教育推進部）、伊藤 恵（国際教育推進部）

神山清光（国際教育推進部）、内藤圭祐（入試広報部長）

渡邊えみ（DP Coordinator）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木 悟教頭が議長となり、12時に開会する旨を宣言した。

小林 格校長の挨拶及び管理機関である亀倉正彦教授の挨拶に続いて議事に入った。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 2023年度事業報告

黒宮国際教育推進部主任より2023年度事業について、第1回検証委員会での助言に対応する形で実践結果について報告があった。主な実践内容は次の通りである。

- ・英語4技能テスト「リングスキル」を用いた英語力効果測定を実施（定量的な検証）
- ・グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ評議会との連携（名古屋地区の特性を明示化）
- ・STATION Aiへの入居（2024年度）申し込み（名古屋地区の特性を明示化）
- ・British School of Ulaanbaatar、東京都立三田高等学校との連携（計画を超えた成果）
- ・東海テレビのメタバース企画において本校メタバースを活用（計画を超えた成果）
- ・スタートアップ企業Polimillとの連携（計画を超えた成果）
- ・三菱みらい育成財団等からの補助金等を検討（取り組みの自走化）
- ・Polimillのシステムでメタバースに関する意見を集積（メタバースの活用）
- ・WWL高校生国際会議にてメタバースに関する議論を実施（メタバースの活用）
- ・メタバース推進協議会との意見交換（メタバースの活用）

また、実施計画のうち未だ実施されていない事業の報告があった。主な未実施事業の内容は次の通りである。

- ・生徒の自己評価に関して、WWL対象生徒へのATLの導入
- ・留学生や外部組織との関わりについて、テロイトトーマツ、名古屋商科大学の特別講座
- ・高大連携について、データサイエンス、アカデミックリテラシーに関する実践
- ・関係機関の情報共有体制の整備について、情報集積のシステムの整備

2 検証委員による評価・助言

検証委員より事業報告に対して次のような評価及び助言があった。

光永悠彦准教授：

- ・英語能力などの検証を実施している点はWWLの意義に合致するが、英語能力のスコアなど量的指標と生徒の態度など質的指標を、カリキュラムの評価につなげることが重要である。
- ・高大接続への対応は今後重要になってくる。データサイエンスやアカデミックリテラシーに関しては実践すべきである。

鶴飼宏成教授：

- ・WWL指定後に各校が自走した運営を目指すことについて、他の助成金に頼ることは自走とは呼べない。
- ・現在学内で行われている取り組みを見直し、扱う内容をスリムにしていくことが重要である。
- ・成果普及等について、外部の既存の仕組みを最大限活用するとよいと思う。スタートアップ等でもすでに県内で動いている仕組みもある。

小野裕二教授：

- ・DX整備を進めるにあたり、メタバースなどの特定項目に対する補助金については調べる価値はある。
- ・学習の成果を把握し、ゴールに照らし合わせたアセスメントが必要である。
- ・計画したことは実行しないと評価につながらない。

3 カリキュラムアドバイザーによる評価・助言

カリキュラムアドバイザーである木本健太郎様より「取り組んでいるプロジェクトが多く、少し広がりすぎており、優先順位をつけて取り組むことを勧める」旨の助言があった。

4 運営委員による評価・助言

運営委員より事業報告に対して次のような評価及び助言があった。

伊藤 博教授：

- ・取り組んでいる事業が多く、フォーカスが少しブレているように見える。他校との差別化を図り、取り組みを減らすことを検討する時期にきているかもしれない。
- ・学習成果の把握やDXの部分での未整備の指摘もあるが、一つの中学・高校としてはすばらしい活動をしている。

北村友人教授：

- ・事業を通じて生徒・教員・学校に「変化があった」ことを明確化すれば、より成果がわかりやすくなる。
- ・取り組んでいることが多いと感じる。自走化のためにも優先順位をつけるとよい。
- ・他校でもやれることを削っていけば、名古屋国際高校でやるべきことが見えてくる。それをやり続ければ学校の特色として定着すると考える。

5 管理機関による評価・助言

管理機関である亀倉教授より次のような評価及び助言があった。

- ・ 3つある事業の特徴のうち、「グローバルな教育」については既の実績があり、「イノベーション的な人材の育成」「ALネットワークの構築」についても発展、進行中であると言える。
- ・ ゴールがわかりにくいと評価につながらないので、事業実績の見せ方やまとめ方を工夫するとよい。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、13時に閉会を宣言した。

【12】カリキュラム委員会

1 議事録

第1回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：5月18日（木）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

郷地 順 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、片山寿弘（参与）、鈴木 悟（教頭）

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 2022年度作成のカリキュラムマップについて

黒宮国際教育推進部主任が、カリキュラムマップの内容についての改善点や使用法の検証を求めたのに対し、木本様から次のような意見があった。

- ・ウェブサイトの各クラスのポリシーについて、学校全体のポリシーとして「建学の精神」の内容や「5つの能力」のポスターを各学科の手前のページに置いて、学科・クラスごとの特徴などがわかる概念図のようなものを各ページに置くとよい。
- ・目標を立てて、計画・工夫・実行、そして評価（自己評価・他己評価）する、というルーブリックに行き着くのだと思う。
- ・生徒が理解できるように、表現や用語をわかりやすく（具体的に）する必要がある。
- ・目標をより具体的に、数値化・見える化しないと評価しにくい。
引き続き木本様から、シラバスと評価について次のような意見が出された。
- ・「5つの能力」の項目を入れるのはとてもよい。
- ・あっているかは別にして、「やってみる」ことから始めるべきである。
- ・シラバスに評価の欄を作るのもユニークで面白い。
- ・評価（数値）のつけ方を提示できるとやりやすくなる。
- ・評価を数値化することで、主観の評価が客観的なものになる。
- ・先生の評価の他に、生徒自身の評価が加わるとよい。

2 2023年度カリキュラム開発会議の目的と目標

次の2つのテーマを並行して議論していくことを確認した。

（1）カリキュラムマップ・シラバス（ConnectEd）の有効性を高め、生徒・教員の資質向上を目指す。2年目のPlanを実施（Do）していく。（PDCAを回していく）

(2) 新しい概念を見つける。(日本型グローバルカリキュラム)

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第2回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：6月29日(木) 11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン(ビデオ会議システム(Zoom))

出席者：木本健太郎様(カリキュラムアドバイザー)

〈ISA グローバル探究チーム〉

郷地 順様、村野廣太様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格(校長)、栗本貴行(中高担当部長)、片山寿弘(参与)

黒宮祥男(国際教育推進部主任)、宮尾国之(事務局)

議事の経過及び結果

小林校長が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

はじめに、第1回会議の中で2023年度は(a)カリキュラムマップ・シラバス(b)日本式の革新的なカリキュラム、について並行して議論を深めるという方向性が示されたことを受けて、以後会議ごとにa・bを交互に議論する方向性で進めることを確認した。

第1回会議：(a)カリキュラムマップ・シラバスについて

第2回会議：(b)カリキュラム・教育法と教科・科目の適応性

第3回会議：(a)カリキュラムマップ・シラバスの進行状況

第4回会議：(b)

次に、黒宮国際教育推進部主任から、日本式の革新的なカリキュラムについて、「教育法と科目・教科は、適材適所があるのではないか」「世界共通で必要とされる素養(汎用性)と日本で学ぶ世界に賞賛される素養(独自性)が必要ではないか」との考えから、次のような質問をし、その後意見が交わされた。

- ①どのような教え方が日本式・欧米式なのか。あるいは、インド式など違う地域の教え方はどのようなものであるか。
- ②日本式・欧米式に適した教科・科目はあるのか。
(例)世界的に日本の数学に関する学力は高いが、数学に日本式の教え方が有効か。
- ③日本・欧米・その他の地域で有効とされる教科・科目は何か。
(例)日本人の礼儀に関する世界的な賞賛がある。「道徳教育」の有効性はあるか。

[木本様]

いわゆる日本式と欧米式とでは、やり方の違いが特徴となっている。

- ・日本式：teacher centered learning（inputの割合が多い）
- ・欧米式：students centered learning（outputの割合が多い）

[片山参与]

全ての教育法を調べて適所に当てはめていく作業は時間や労力の無駄だと思う。

[黒宮教諭]

- ・科目や單元ごとに探究に向いていないものもあるのではないかと。それらを研究したものがあれば利用したい。
- ・inputとoutputのバランスが難しい。

[木本様]

- ・初歩レベルではinputを多く、レベルが上がるにつれてoutputの割合を増やしていく。
- ・知識の定着を図るためのactive learningと、outputとしてのディスカッション等とは分けて考える。
- ・レベルが低い生徒には、inputが多い日本式とactive learningで知識の定着を図るとよい。
- ・理科と社会は、student centeredの探究学習に向いている。
- ・数学の演習における、生徒に問題を解かせていくやり方は、日本式の中でもstudent centeredがうまく機能しているケースと言えるのではないかと。
- ・インドや中国の数学（算数）はinputの割合が多い。

[黒宮教諭]

inputが多いインドや中国に世界的な活躍の面で日本が置いていかれているのはなぜか。

[木本様]

- ・なぜ学ぶのか、というようなキャリア教育が進んでいない。
- ・科目を自分で選べるとより主体的になりやすい。

[小林校長]

- ・制約はあるが選択科目を増やせるとよい。
- ・カリキュラム開発の観点から、議論の内容はどこに示されるか。

[黒宮教諭]

全ての学校教育活動に共通したものを示したい。概念的なものを具体化してカリキュラムマップやシラバスに落とし込みたい。

[木本様]

OECDの「生徒エージェンシー」の概念（道徳性、倫理性を求める）を入れるとよい。

[村野様]

- ・欧米では、教育のやり方の根拠を示す（心理学的、脳科学的等）。日本は経験による。
- ・欧米では、inputをやっている理由を生徒が知っている。
- ・どこに向かおうとするかでinputとoutputの割合が変わってくると考える。

[黒宮教諭]

なぜ学ぶのか、なぜその知識が必要なのかを明確に示せる教員の力が必要となる。

[小林校長]

Well-beingが課題となっており、その関連からも「生徒エージェンシー」に注目したい。

[黒宮教諭]

日本のカリキュラムは、「生徒エージェンシー」のスペシャリストを目指してもよいかもしれない。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第3回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：9月7日（木）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

郷地 順 様、村野廣太 様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

伊藤春香 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、鈴木 悟（教頭）

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

黒宮国際教育推進部主任が、カリキュラムの評価方法や「良い」カリキュラムについて意見を求め、次のような意見が出された。

[木本様]

- ・通常は、年度末に、試験などにより、教員が評価を行っているが、生徒に評価させるのもよいと考える。
- ・事前に目標を設定させ、事後に達成度などで評価させる方法などは、生徒にとってわかりやすいのではないかと考える。
- ・生徒個人（自分自身）だけでなく他人やグループなど、あらゆる角度から評価し、それを総括することも有効であると考えている。

[伊藤様]

自分の学校のカリキュラム以外を知らないと評価するのは難しいと思うが、海外研修で他の国のカリキュラムを体感した生徒は、名古屋国際のカリキュラムを客観的に見ること

ができるのではないかと考える。

[栗本中高担当部長]

カリキュラムの「良い」でなく、改善を繰り返して、結果的により「良い」ものになる。そのプロセスが大事である。

[黒宮教諭]

完成形はないと考える。その時にあった最適な形を次年度へ繋げることになる。

[栗本中高担当部長]

- ・評価の指標には、アンケート、成績、単位の取得状況、ヒアリング、留年率などのデータ収集が重要になってくるが、そのためには情報を収集分析する部門（IR:Institutional Research）が必要となる。各教科に情報を整理するIR担当をおく必要がある。
- ・時期については、教育課程の改善かシラバスの改善か、そのレベルにより議論の期間が変わる。教育課程だと、県への5月の提出のためには3月の理事会で諮ることになるので、2月末には方向性が決まっているべきである。

[黒宮教諭]

現場レベルの検証を12月から1月に、開発会議レベルの検証を2月に実施する。

[木本様]

- ・高校ではデータに基づいた評価は少なく、主観によることが多い。客観的な評価を心がけるとよい。
- ・カリキュラムマップからシラバスへの落とし込みや授業の内容については、現場レベルで検証する。
- ・大枠・概念・評価・トレンドなどは、カリキュラム開発会議等で検証する。

[小林校長]

検証の前に、データ分析の担当を国際教育推進部から人選しないといけない。

[黒宮教諭]

集める情報を明確にしたい。

[木本様]

情報の収集や分析は、大企業ならばマーケティング部門がやるようなことであり、学校では現実的には難しい。実施可能なレベルから始めるべきである。

[栗本中高担当部長]

分析担当者が情報の収集も担うのは困難なので、ボトムアップしたものを集約するやり方なら可能である。

[黒宮教諭]

学年・学級経営案に数値を書くようにするのはどうか。

[木本様]

実施しているアンケートがあればそれを活用し、シラバスと連動させた振り返りや授業の内容と授業者の評価について分析することができる。

[黒宮教諭]

カリキュラムの評価方法に、他校が参考とできるような汎用性を持たせられるか。

[木本様]

今議論している「どういうタイミングで、何を、誰が、どういうデータに基づいて」を明確にしていけば、評価方法のベースになりうる。

[村野様]

- ・ 1年に1回の評価だと、改善する・分析する・疑問を解決する・どの点を改善すればよいのかなど、評価を活かすのが難しい。短期的な評価があれば、より明確に具体的に改善しやすい。
 - ・ 小さな評価の積み重ねを繰り返すことで、全体を改善できるのではないか。
 - ・ PDCAのCAのハードルを下げると取り組みやすい。
- 以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第4回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：10月26日（木）14時40分～15時25分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

郷地 順 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、片山寿弘（参与）

鈴木 悟（教頭）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）

大西直子（国際教育推進部）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、14時40分、開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 WWL高校生国際会議について

黒宮国際教育推進部主任からの、「高校生が主体的に行う会議とはどのようなものか」との質問に対して次のような意見が出された。

[木本様]

- ・ 教師と生徒の関わり方として、student centered learningの考え方が会議の実施にもあてはまる。
- ・ 教員はファシリテーター、サポーター役に徹して、生徒が話し合いを経て決定する。
- ・ ファシリテーターとして、枠組みやキーワードを与える程度から始めて、状況により少しずつ介入していくとよい。しかし考える部分は生徒でなくてはならない。

- ・ teacher centeredとは逆に、放任してしまうケースでは、主体的になっているようで主体的になっていないことがある。
- ・参加者が主体的であったかを判定することは難しい。

[黒宮教諭]

- ・教員が助言すると、教員が目指してほしいゴールへ導いてしまい、teacher centeredになりがちである。
- ・アンケートに、具体的に「自分で決定をしたか」など行動評価を入れるとよいのではないか。主体的であったかが明確になるような事例などを用意できれば、生徒も教員も評価しやすいと考える。

[鈴木教頭]

導入部において、教員が用意するところと生徒の主体性に委ねるところの線引きが難しい。

[小林校長]

ある程度の方向性は必要である。遠回りは認めてよい。

[大西直子教諭]

毎年メンバーが違うので、その時のメンバーを見て対応を変えていかないといけない。

2 主体的なカリキュラムについて

黒宮教諭が、教員が「主体的に」教育活動ができるカリキュラムについて意見を求め、次のような意見が出された。

[本本様]

- ・教員自身で決めていける、ということが主体的であると言える。
- ・探究学習では主体的な教育をしやすい。
- ・総合・学校設定科目を学内で協議している学校などは、主体的に活動できている。
- ・教員も生徒もそれぞれが主体的であるべきである。
- ・人生は本来主体的であるべきものである。そのために学校で主体的な学びの練習をする。

[鈴木教頭]

- ・教科の内容は変えられないが、教え方で変えられると考える。
- ・MYPのUnit Planは参考になる。概念を先に設定して、教える内容は教員が考えるようになっていく。

[大西直子教諭]

数学に関しては、日本の教科書を確実にやっていたら、DPにも対応できている。日本の算数、数学のレベルは高い。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、15時25分、閉会を宣言した。

第5回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：11月30日（木）14時40分～15時25分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

村野廣太 様、郷地 順 様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

伊藤春香 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

栗本貴行（中高担当部長）、鈴木 悟（教頭）

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、大西直子（国際教育推進部）

宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、14時40分、開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 WWL高校生国際会議について

黒宮国際教育推進部主任が、WWL高校生国際会議に関して、前回の議論に基づき主体的に教員及び生徒が計画を立てられるように準備中である旨の報告をし、続いて「より主体的に取り組めると実感できる」ためのアドバイスを求めたのに対し、村野様から「担当している人以外からの評価を客観的に見せてあげるとよいのではないか。違う角度からの視点・コメントなどが振り返る材料となる」との意見があった。

また木本様から、次のような助言があった。

- ・「熱中サイクル」が参考となる。「実感」は「熱中」に置き換えて考えられる。
- ・「仮説」「試行」「歓喜」「内発動機生成」それぞれの場面でフォローが必要である。
- ・「歓喜」後に、リフレクションや原因分析から内発の動機へと促す。
- ・目標設定を小さくし、小さな成功を認めるようにしないと、反省点に目が行きがちになる。

さらに「熱中サイクル」に関して、村野様が「大きな企画の終了を「歓喜」で終わらせず、あくまで通過点として意識づけることが大切である」と述べた。

2 カリキュラムの評価について

黒宮教諭が、「カリキュラムの評価のための客観的データの取得方法として、現在実施している授業評価アンケートを利用したいが、カリキュラムに関するアンケートの項目を追加するとすれば、どのようなことがよいか」と意見を求めたのに対し、木本様から「カリキュラムの流れが理解しやすかったか」「カリキュラムの内容・項目の良し悪し、その理由、意見などを自由記述としてはどうか」、村野様から「生徒自身を評価する項目：刺激があったか、コミュニケーションが取れたか、自ら考え、自ら発信できていたか」との例を挙げていただいた。

3 「生徒エージェンシー」獲得を促すカリキュラム（日本らしいカリキュラム）について

黒宮教諭が「生徒エージェンシーの概念を取り入れた、社会とつながるカリキュラムの

骨組みを作りたい」と述べ意見を求めたのに対し、木本様から「Well-Beingやどうありたいか、どうなりたいか、という世界的な概念を取り入れられるとよいと思うが、この概念にこだわらなくてもよいかもしれない。理解が難しい広い概念なので、具体的なキーワードを言語化していくとよい」旨の意見があった。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、15時25分、閉会を宣言した。

第6回WWLカリキュラム開発会議

日時：2月1日（木）14時40分～15時25分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

郷地 順 様、村野廣太 様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

伊藤春香 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、片山寿弘（参与）

鈴木 悟（教頭）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）

大西直子（国際教育推進部）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、14時40分、開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 カリキュラム評価の追記事項について

黒宮教諭が「前回会議において、実施している授業評価アンケートにカリキュラムに関する項目追加の意見があったが、アンケートについて意見を求めたい」と述べたのに対し、次のような意見が出された。

[木本様]

・他校でも、カリキュラムの評価については計画で終わり、実施はできていないと思われる。

・既存のアンケートより、目的にあった新たなアンケートを行うほうがよいのではないか。

・一部の生徒へのインタビューも有効である。

[栗本中高担当部長]

名古屋商科大学では、国際認証の関係でアンケートは必須であり、調査対象の母集団抽出して行っている。

[鈴木教頭]

学校（先生）側と生徒側との比率や、設問数の理想はあるか。

[木本様]

決まった比率はない。10分程度で答えられる程度だと思われる。

[黒宮教諭] インタビューは取り入れたい。

[木本様] インタビューでは、「良かった」「悪かった」の両極から聞くとよい。

2 2024年度に向けて

黒宮教諭が、2024年度に向けて、OECDの「生徒エージェンシー」や「ナゴヤ学びのコンパス」を意識した「日本らしいカリキュラム」について意見を求めたのに対し、次のような意見があった。

[木本様]

- ・事業の最終年度であるので、新しいカリキュラムを少しでも実施して検証まで進めないといけない。
- ・名古屋国際高校の特色でもあるグローバルの要素は含めたい。
- ・日本式による基礎学力と探究学習の偏差値との相関はあると考えるので、日本式のよいところは残したほうがよい。
- ・Eラーニングなどを利用して、基礎学力をつけることにも生徒の主体性を持たせてもよい。

[小林校長]

生徒、教員ともWellbeingが目的である。ConnectEdを絡めて教員の「エージェンシー」も探っていくとよい。

[大西教諭]

生徒との活動報告作成にあたり、年間を振り返る中で主体性の重要性を感じている。

[木本様]

学校でないとできない協働的な学習の割合を増やすため、Eラーニングは活用してもよいと思う。

[村野様]

Eラーニングは充実しているので、受験対策の部分は生徒に任せられるかもしれない。教員にとっては、その分生徒の自走のサポートに回る余裕ができてくるのではないか。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、15時25分、閉会を宣言した。

2 カリキュラムアドバイザーの報告・所感

2023年度のWWLカリキュラム開発会議の活動に関して、以下の通りご報告する。

内容としては、「カリキュラムマップ・シラバス」と「日本式の革新的なカリキュラム」の主に2つについて議論を行い、コメントフィードバック及びアドバイスを実施した。

まず、カリキュラムマップ・シラバスに関しては、主に「カリキュラム評価方法」に関して取り扱った。それぞれの評価の指標のデータの収集が重要であること、情報を収集分析する部門（IR）が必要であることを提言した。また、現在の授業評価アンケートをシラバスと連動した方が良く、授業評価アンケートに、カリキュラムに関するアンケート項目も追加した方が良いとアドバイスをを行った。

WWL高校生国際会議へ向けては、高校生が「主体的に」行うとはどのような会議なのかということ言語化した。生徒が自分で決定したと感ずる程度が重要であり、具体的な行動評価のアンケートを実施したらどうかと提案を実施した。一方で、教員自身が主体的に教育活動ができることも重要だとし、探究的なアプローチ（名古屋国際高校で各教科で行っている社会とコネクしたテーマ）は教員主体として動ける良い施策であり、MYPのUnit Planのように概念を先に設定して教える内容は、教員が考えるようにするような取り組みは導入してもよいのではとアドバイスをを行った。

次に、日本式の革新的なカリキュラムに関しては、改めて日本式と欧米式の教育法について意見交換を行い、教育法と科目・教科は適材適所があるのではないかと位置づけた。基礎学力をつける学びは日本式が得意とし、創造・アウトプットを中心とした応用力は欧米式が得意そうである。また、世界的にみて日本の数学学力は高く、数学の教育法は日本式で有用だと示した。

また、2024年度へ向けては、「生徒エージェンシー」のキーワードを提言した。教員エージェンシーもその次へ向けて議論をしていきたい。

2023年度のカリキュラム開発会議は、前年度の議論を踏まえ、より具体的に議論を深めることができたと感じている。2024年度は実際に実行に移し、PDCAのサイクルをしっかりとまわしていくことが必要だと思われる。

また、WWL検証委員会時にもコメントしたが、取り組んでいるプロジェクトが多く、少し広がりすぎており、大切にしたい軸を定め、優先順位をつけて取り組むことを勧める。

名古屋国際中学校・高等学校カリキュラムアドバイザー
木本健太郎

【13】講評

イノベティブなグローバル人材育成への貢献

文部科学省により採択されたWWL（ワールドワイドラーニング）プロジェクトは、Society 5.0 への進化を見据え、革新的なグローバル人材の育成を目指す先進的な取り組みである。名古屋国際中学校・高等学校はWWL以前から文部科学省の地域協働グローバル事業など、長年、国際教育を推進する上で革新的な活動を展開してきた。名古屋国際中学校・高等学校が日本の先端をいくカリキュラム開発の拠点校として果たす役割は重要である。

最新のイベントとしては2024年2月3日に行われたConnectEd 2024が挙げられる。ConnectEd 2024の開催は、教育関係者や企業担当者が集う場として、グローバル人材育成の実践的なプラットフォームを提供した。特に、国際経験豊富な中部経済連合会国際部部長の野村一樹氏による基調講演「名古屋から広げる国際経済交流」は、イノベーション（そしてイノベティブグローバル人材）の創出など、教育の未来に関する深い洞察を提供し、地域（グレーターナゴヤ）からグローバルへの視野を広げる重要な示唆を与えた。

参加者の多様性をさらに高め、学生や教育現場の意見を直接取り入れることは今後の課題でもあるが、先述のように名古屋国際中学校・高等学校はこの点においても長年の経験と知見の蓄積がある。名古屋国際中学校・高等学校の生徒たちは実際に海外研修や先端技術を活用した会議への参加、企業との協働による授業展開など、様々な取り組みを行い、教員は学生の学びの質を高め、実世界における問題解決能力の向上に努めている。ConnectEd 2024ではカンボジアやベトナムでの海外研修に関する活動報告がなされたが、コロナ禍においてもオンラインで海外研修を継続された。これらの取り組みは、まさにWWLが目指す「学生たちが（コロナへの対応などを含む）グローバルな課題に積極的に取り組み、グローバル人材へと成長するための重要なステップ」であると言える。

またWWLでは全教科にわたる探究学習を推進し、社会と連携することで学びを深めるアプローチを採用している。このイノベティブ・アプローチにより、学生たちは学問の壁を越えて多角的な視点を持つことができ、実社会の複雑な問題に対してより効果的に対応できるようになる。今後の挑戦としてメタバースや国際理解研修のさらなる評価及び活用が挙げられる。さらに、高大接続のシステムの確立は、教育の継続性を保ちながら、包括的な学びの質を高める上で重要である。

総括

WWLプロジェクトは、教育の未来における革新的な取り組みの先駆的な例であり、グローバルな社会における教育の重要性を示している。イノベティブ人材を生み出すための教育は、それ自体がイノベティブでなければならない。このプロジェクトが生み出す

成果は、今後の教育改革の方向性を示唆するものであり、それを継続的に評価し、発展させていくことが期待される。

名古屋商科大学大学院マネジメント研究科
伊藤 博 教授

ホール・スクール・アプローチ（A Whole School Approach）への期待

名古屋国際中学校・高等学校が主導するWWLコンソーシアム構築支援事業に関して、昨年度も同様の所感を記したように、「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」の構築を目指して、着実に成果を上げていくと高く評価したい。とくに、本事業は多角的なプログラムを展開しながら、多くの関係者との連携を実現しており、まさに「コンソーシアム」を構築していると評価できる。

そのうえで、やはり昨年度も期待を込めて改善できるのではないかということを指摘させていただいたが、今年度もさらなる事業の充実を目指すうえで、ぜひご検討いただきたいと思うことを記してみたい。

本事業で取り組んでいるような、協働的、実践的、そして探究的な学びを展開していくうえで、学校全体としての取り組みをさらに推進することが欠かせない。そうした取り組みを、「ホール・スクール・アプローチ（A Whole School Approach）」（あるいは「機関包括型アプローチ（Whole Institution Approach）」）という。ホール・スクール・アプローチでは、学校全体で立てた目標に向かって、生徒たちと教職員たちが協働し、さらには地域コミュニティとも連携しながら、多様な教育実践を行うことが必要となる。そうしたアプローチを通して、生徒や教職員の学校への帰属意識が高まり、生徒たちにとってはより有用で実践的な学習機会が提供され、教師にとっては自らの専門性を向上させる機会が創出される。こうしたホール・スクール・アプローチでは、トップダウン型のリーダーシップも一定程度は必要になるが、それ以上に教職員によるボトムアップ型の協働が重要になる。

名古屋国際中学校・高等学校による本事業では、かなりのレベルでホール・スクール・アプローチが実現されつつあると思えるが、教職員の事業への関与の度合いについては、さらなる改善の余地があるのではないだろうか。もちろん、どのような事業においても、すべての教職員が等しく同じだけの熱量をもって参加するなどということは不可能であるが、できるだけ多くの教職員が自ら事業に関わろうとする姿勢を持てるようになると、それは教職員にとどまらず、生徒たちの間にも確実に伝わっていくはずだと考える。いま以上に多くの教職員が、主体的に本事業に関わるような学校文化が醸成されると、本事業はますます充実したものになっていくに違いない。

それと同時に、昨今、学校現場における働き方改革も重要な課題であるため、本事業への関与が単純に教職員の労働量を増やすのではなく、より多くの教職員が協働することによって、むしろ業務の効率化が図られていくといったことも大切であると考えます。

すでに大きな成果を上げている本事業であるからこそ、さらなる発展を目指して、ホール・スクール・アプローチが実現していくことを、心から期待している。

東京大学大学院教育学研究科
北村友人 教授

【14】次年度に向けて

名古屋国際中学校・高等学校は、令和4年4月から令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（以下、WWL）の指定を受け、2年目を終えようとしている。1年目を創成期とするならば、2年目は創成期の実践活動を精査する時期と言える。カンブリア紀における大爆発のごとく生まれたさまざまな実践活動の中から何が残り、何がなくなるかというイメージだ。その精査は、WWLの最終年度である2024年度を終えた後に持続的に活動が続けられるようにするためである。しかし、「持続できるかどうかという指標で活動を精査する」という点で考えた場合、人的な資源・時間的な資源・財政的な資源が大きなネックになってくる。そのどれもが欠けてしまうとおそらく活動は萎み、「何となくやっている」「最低限やっている」「一部の生徒のみ活動している」というものになってしまう。ワールド・ワイドで学ぶべきところに学内に広がっていないのでは本来の学びではない。その点も踏まえ、次年度に向けての課題を挙げる。

1つ目の課題が「実感」である。学内アンケートを検証してみるとWWL活動に関わっているにもかかわらず、活動をしていないと感じる生徒が多い。生徒に対して「この活動は、WWLとこうした点で関わりがあるよ」と話すと、そこで気づく。この場合は、「実感」がなくても、やっていることや身につけていることは変わらないから目標は達成しているという考え方と、もう一つが「実感」が持って活動した方がより



効果が生まれるため、達成できていないという考え方がある。本プロジェクトに関して、当然だが後者が理想である。来年度は、この「実感」が生まれるような仕組みを構築していくことが課題である。自らの学習がどのような目標に向けているかという実感、そしてWWL事業を通じて自らの学習が社会とどのように繋がっているかという実感を持ってほしいと思う。

2つ目の課題が「継承」である。これは、当然ながら資金が継続的にあれば事業の持続可能性は高まるとは思うが、特に人的資源の継承がより重要であると感じる。本プロジェクトはSGHからグローバル型、WWLと3つの段階を経ている。その事業全てに関わった教員は少ない。また、外部とのコネクションを持った教員も一部である。本事業に関わったX世代の教員からY世代の教員へ知的な財や



ネットワークの財を継承することが持続可能な事業となる重要な点である。ただし、継承だけでなく、Y世代が考える新しい思考も認めていく必要もある。スクラップ&ビルドも含む。そして、X世代が積み重ねた実績や経験、プライドがY世代の教員が行うチャレンジを阻害することも念頭におかなければならない。

そうした点も含めて、Y世代が新しい時代の新しいチャレンジをし、失敗をしてもよいという環境はどう作るのかが継承には重要であり、次年度以降を検証していきたい。それは、生徒自らの環境においても同様である。

最後の課題は、リアル体験の重要性である。先端技術の発展により、インターネット環境のみならず、身の回りの家電製品にさえAiが搭載され、プログラミングされていないものが少なくなる現代において、そうした技術を学ぶことは、生徒にとっては避けて通れない。その意味も踏まえ、本校でも次から次へと登場する新しい技術に対してその有効性等を長時間議論することをさげ、「とりあえず体験してみる」こととし、その技術に関する議論もWWL高校生国際会議で実施したように生徒にも考えさせる機会を設けた。これは、生徒が社会に出た時には、学生時代に出会った技術はさらなる発展をしていたり、なくなっている可能性が高い。その点を考えると、新しい技術が登場した時に「とりあえず体験する」という思考を学生時代に身につけた方が有効であると考えたからだ。技術自体を学ぶのではなく、技術を挑戦的に体験する思考を学ぶことだ。その反面、リアルな体験を疎かにする場合もある。世の中にある情報は、あくまで他人が体験したり、学んだりした知識の集積である。生徒が創造した情報ではない。例えば、国際理解研修でカンボジアに行った際、川に入って投網を体験したグループがある。現地の方に交渉をして、やらせてもらったのだが、川に入った時の川の温度や網の重さ、投げる難しさは、それを体験した生徒だけが感じた情報である。

現地の子どもに日本の遊びを教えたグループは、言葉が通じない状態でも交流することで自分なりに感じた何かを得たことだろう。その情報がインターネット上に書いてあったとしてもそれは、書いた人が感じた情報である。情報を受け取りやすい社会は、逆にそうしたリアル体験をしなくても、誰かが教えてくれると錯覚しやすい。しかし、それは、自分の言葉でない。グローバル化社会において、自らの考えを述べることは重要である。その時に自分の言葉でないことを自分の言葉のように話すことは危険である。そうした点も含めて情報に批判的になり、自ら体験してみることが今の生徒たちにはより重要だと感じる。



以上の3点の課題は、人に内在する意識の問題でもある。その結果、何を持って検証するか難しい点でもある。ただ、古典的な考え方もかもしれないが、「WWL校としての誇りや愛校心」が高まることがその証明になるのではないかと感じる。しかし、何をもって誇りや愛校心を高まったかを知るのかというさらに課題が発生するが、それこそ日本の教育界にそのヒントがあるように感じる。

以上から本WWL事業において、探究活動や社会との共創、学校間連携等の新しい教育法の検証だけでなく、過去の教育法を改めて見つめ直し、さらに海外の教育法も取り入れ、学校独自のカリキュラムを作り上げることが本筋であると採択2年目の活動を通じて思う。採択から2年が経ち、Aiの発展や国際紛争など構想計画を策定した時と比べ、想像ができていない社会の変化が起きている。構想計画通り進めるのか、変化した社会に合わせて変化させるべきか。ただ、思うことは、「環境変化の中で、順応に対応し、変化をしたものが生き残る」という種の生存を考えた場合、本校の活動も思い切って変化を受け入れ、常に変化に対応できるチャレンジをしていきたいと感じる。

名古屋国際中学校・高等学校
国際教育推進主任
黒宮祥男

文部科学省 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

名古屋国際中学校・高等学校

2023年度 研究開発実施報告書

2024年3月発行

発行 学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

〒466-0841 愛知県名古屋市昭和区広路本町1-16
TEL：052-853-5151

印刷 株式会社 NPCコーポレーション

〒530-0043 大阪府大阪市北区天満1丁目9番19号
TEL：06-6351-7271
FAX：06-6352-7479



名古屋商科大学系列校

名古屋国際 中学校
高等学校

NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL